
F/A **フリーダム/アドベンチャー 第一話 ドリーマーボーイ&ラジカルガール**

流都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F/A フリーダム/アドベンチャー 第一話 ドリーマーボーイ&ラジカルガール

【Nコード】

N9304G

【作者名】

流都

【あらすじ】

これはかつて栄えていた超文明が滅び去った後、かつての文明の残滓を使う事でささやかな生活を送っている人達と、新たな何かを求めて自ら危険の中に飛び込む冒険者達が生きる、失われた時代Lostと呼ばれる世界の物語。とある惑星に住むネコ族の少年口ツクは、冒険者になる事を目指しながら兄弟や仲間たちと小さな村で生活を送っていた。ある日空から落ちてきた宇宙船、その船に乗っていた獅子族の冒険者の少女リカル。二人の出会いが世界に新た

な物語を作り出した。

剣と魔法と銃とメカ。何でもアリの世界で巻き起こるアドベンチャーストーリー第一話。夢見るだけじゃ終われない、目の前の見えない壁を蹴り倒して、自分の願いを叶えるために新しい世界に飛び出していこう！

プロローグ 獅子の冒険者

プロローグ

「冗談じゃないよ。最悪だ」

そう言いながら、少女は走っていた。ほの暗い遺跡の中を、ヘッドライトの光だけを頼りに出口へと向かって。

「調査はうまくいったのに、全く」

そう一人で叫びながら、少女は後ろから迫ってくるものから必死になって逃げていた。

少女は冒険者である。冒険者とは、世界各地に存在する遺跡や前人未到とされる土地を調査し、そこから出土される財宝や、古代文明の貴重な機械や技術といった遺産を発見することを生業としている人達の事である。

今少女が入っている遺跡は、長い間入口が開かないとされてきたもので、少女は自分で見つけたカギを使って遺跡の扉をあけて、内部の調査を始めた。

一日以上かけてこの遺跡全体の通路を調べあげ、いくつもの罫を解除、そして一番奥の部屋の中にあつた宝物を手に入れた。少女にとってはいつもの仕事、当たり前のことである。

予想外のこと起きたとしたら、風化した壁がひび割れを起こして崩れた事と、壁から黒い液体が噴き出た事、ひび割れが部屋全体に広がり部屋が崩れた事と、この衝撃で遺跡の最後の仕掛けが作動した事、そして。

「こんな所に油が埋蔵されているなんて」

時々後ろを振り返りながら、少女は一人呟いていた。噴き出てきた油は崩れた部屋の出入り口からどんどんあふれ出てきており、ものすごい勢いでかさが上がってきている。

油が出てきた時点で危険を察知した少女はすでに部屋から出て、遺跡の入り口に向かって走り出してたため何とか脱出できると思

った。しかし通路の角を曲がった瞬間目の前にいるものを見て、少女は自分の考えが甘かったことを知らされる。

そこにいたのは、遺跡に入った侵入者達から遺跡を守る遺跡の守衛、番人などといった呼び名を持つ機械の兵士ガーディアン。仕掛けが作動したため、休眠状態だったものが一斉に動き出したのである。

通路に立っていたガーディアン達が高举して少女に襲い掛かる。少女は戦おうと構えたが、油が迫っているこの状況で足を止めると手遅れになると考えた少女はそのまますぐにガーディアンに向かって走り出した。

体当たりや剣、ツメで攻撃してくるガーディアン達の攻撃を、少女は巧みなステップやガーディアンロボディに手をかけて受け流すなどをしてかわし、そのまま勢いを殺さずにガーディアン達を振り切り走り去って行った。

「ここを超えて、あと半分」

そう呟きながら走る少女の目の前に、少し前の角から突然ガーディアンが現れた。銃のついている腕を構え、そこから火炎弾を少女に向かって撃ってきた。迫る火炎弾、それを少女は通路の左側の壁に向かって大きくとびはね、そのまま壁に手と足をつけると同時に壁をけりつけ、三角跳びの要領で火炎弾をかわした。

地面に着地する少女、同時に起きた爆音と閃光。しまったと少女が後ろを振り返ると、今少女がよけた火炎弾が油の海に入り火がついてしまった。

舌打ちをしてから前を向くと、ガーディアンが次の攻撃のために銃口に炎をためていた。それを見た少女は、腰に下げている拳銃を取り出し、ガーディアンに向かって構えた。

「いい加減にしてよね」

そうガーディアンに言い放ってから、少女は銃の引き金を引いた。その銃からは圧縮された空気の弾が打ち出され、ガーディアンの腕部の銃口に飛び込んで行った。

次の瞬間、銃の内部にたまっていた炎と撃ち込まれた空気弾が反応して、腕と、腕につながっていた背中が爆発。動きが止まった事を確認した少女はすかさずガーディアンを走り抜けた。その後、後に燃え上がる油がガーディアンを飲み込み、その機械の体を跡形もなく溶かしていった。

走りながら、すぐ後ろまで危険が迫っていることを感じた少女は、背中に背負っているリュックから一本のスティックを取り出した。そのスティックの先端部分には複数のスイッチが、反対側にはスイッチと円筒形の機械がついていて、それはまるでホウキの様な形をしていた。

少女がスティックのスイッチを押すと、ゆっくりと唸るような音を出して機械が作動を始める。それと同時に遠くから轟音が響き、遺跡全体が揺れ始めた。どうやら油が貯まっていた場所に引火してしまっただけでなく、強烈な振動のために、通路の壁に無数のひびや裂け目ができ、天井が崩れてたくさんの破片が落ちてくる。

流れてくる油の量がさつきより増え、炎が波のように通路いっばいに広がりながら迫ってくる。

波の高さが少女の背丈を越え、今まさに少女を頭から飲み込もうとしたその時、少女は手にしていたスティックの赤いスイッチを押して棒を水平に構え、体を引き寄せてから走る歩幅を大きくしてまたがるようにスティックに飛び乗った。

その瞬間、スティックの後ろの機械から粒子の光が現れ炎の波を吹き散らし、そのまま火の付いた油を振り切つてもものすごいスピードで飛んで行った。

その間も遺跡の崩壊は進み、崩れる天井やはじけとぶ壁の破片が少女を襲ってきたが、少女は棒をたくみに操作してスピードを保ったまま、崩れる通路を駆け抜けていった。

「ここを抜けければ外」

そう呟く少女の手には自然と力が入り、視線もさらに鋭くなってくる。少女は棒の出力を上げ、最高速度で直進をした。

だがもう少しというところで、少女は自分の目の前の異変に気がつき速度を落とした。

「入口、閉まっている？何だよ」

少女が入ってきた入口、そこには金属製のシャッターが下りていて、隙間なく入口を塞いでいた。近くで確認しようとしたその時、後ろからガシャンという鋭い音が響き渡った。

その音を聞いた少女はその場で止まって後ろを振り返り、そして小さくため息をついた。その視線の先には入口を塞いでいるのとなじシャッターが下りていた。通路の両側をふさぐ仕掛けはよくあり、少女もその仕掛けを何度か体験しているためこれから何が起きるかもわかっていた。

突然通路の壁が音をたてて開き、中から大量のガーディアンが現れる。ガーディアンは通路まで出てくると次々に侵入者である少女のほうを振り向いてきた。この仕掛けを解除するには、この中にいるガーディアン の指揮官を倒すしかない。

少女にとって全部のガーディアンを倒すことぐらいは何てことは無いが、ここに来るまで、また今も大きな振動が立て続けに起き今にも遺跡がつぶれそうな現状で、時間をかけて彼らの相手をしていることはできない。

「やるしかないね」

ここまでの状況からすぐ次にとるべき行動を決めた少女は、さっそく行動に移った。リュックからもう一本、先端に平らなパーツが取り付けられた短めのスティックを取り出し、右腕に装備しているアームガードにセット、二本の棒のエネルギーをため出した。

その間にもガーディアンは次々と数を増やし、空中に浮いている少女を取り囲んでいく。遺跡もいつ崩れてもおかしくない状態が続いている危険な状態の中で、少女は身動きひとつせずに入口のシャッターだけを見つめている。

壁にひびが入り、大きなカケラが音をたてて崩れる。その音を合図に、少女はスティックのエンジンを最大までふかした。それとほ

ば同時にガーディアン達が少女に向かって銃口を向け、弾丸やビームを撃ってくる。

しかしそれらが当たるよりも一瞬早く、少女はその場から飛び出していた。猛スピードで前のシャッターに向かって突っ込んでいきながら、もう一本のスティックを取り付けた右腕を思い切り後ろに引いた。ガーディアン達は少女を撃ち落とそうと頭上に向かって弾を撃つが、少女はそれを避けようとせず、加速に任せて直進していき、自分に弾が届く前に通り過ぎて行った。

その時通路が激しく揺れ動き、轟音が響き渡った。通路上のガーディアン達は立っていることができずにひっくり返り、少女への攻撃が途切れる。シャッターで仕切られた通路の温度もだんだんと上がってきている。

時間がもう無い事を感じ取った少女は、もう一本のスティックも起動させてさらに加速、速度を上げた。

「ここだ、いけえええ」

そしてシャッターまで近づくと、少女は右腕のスティックの出力を高め、それと同時にストレートでシャッターを殴りつけた。

少女の出した2本分のスティックを使ったスピードとそれに伴う質量、スティックの先端に取り付けられた破砕用の重力波発生ユニットの力で、シャッターに大きなくぼみが作られた。

さらに少女はそのままスティックの出力を高め、シャッターを無理やり押し込み始めた。後ろのシャッターは予想以上の炎と熱のためにとけ始め、いつここにも炎が流れ込んでくるかわからない。

「はあああつ」

掛け声と共にさらに押し込む少女。シャッターに出来たくぼみは次第に大きくなり、シャッターの周りの壁もそれに合わせて歪みだした。

「ガアアアウ」

ここで少女はもう一度右腕を振りかぶり、気合いとともに二度目のストレートを放った。

その瞬間、衝撃に耐えられなくなったシャッターの周りの壁が、轟音とともにシャッターごと外に向かって吹きとんだ。それに合わせて少女も一緒に、すでに夜になって、星が空で瞬いている遺跡の外に飛び出す。ワントンポ遅れて遺跡入り口から爆音と炎と煙がものすごい勢いで吹きあがり、夜空をオレンジ色に染め上げた。

その光景を後ろに見ながら、少女は頭に着けていたヘッドライト付きのインカム・メットを脱ぎ捨てた。その中からは、頭頂部に生えているネコ科の大きな耳と透き通る様な金色の髪が現れ、まとめられていたセミロングの髪が勢いよく風に吹かれてなびいた。

少女は右腕のスティックのスイッチを切ってリュックの中に戻して、着ているジャケットのポケットの中から模様の入った透明なプレートを取り出した。立ち上がる炎の光にそれを映して確認をした少女は、歓喜の声で雄叫びをあげた。

「これであの本の中身は本物、次に狙うものも決まったわね」

夜空を飛びながら、少女は一人考えをまとめるようにつぶやく。

「よし、次にむかってガンバっていこー」

そう大声でまとめると、少女は遺跡を後に星空に飛び去って行った。

かつて、宇宙には高度な文明が存在していた。星の海を渡る船を作り上げたある星の人類は、故郷の星を離れてほかの星、ほかの銀河に進み自分たちの地図を広げていった。

やがて彼らは、自分達とはまったく異なる知的生命体との遭遇を果たす。文明や文化の違いによる隔たりや種族の壁、意識や確執による争い、しかし平和を求める人たちの声が困難な状況を打ち破る原動力となり、宇宙は様々な人類、人種と文化を取り込みながら加速度的に発展をしていった。

しかし始まりには終わりがあるように、栄華を極めてきた文明にも終止符が打たれた。文明が突然滅んだ原因はわからず、歴史の中の大きな空白となってしまい、その文明は先史文明と呼ばれるよう

になった。当時の文明は今の時代、様々な遺跡や出土品として発見される様になり、そしてかつての文明が失われ、新しい価値観を見いだせずに人々が生きているこの時代を、人々がL o s t と呼ぶようになって久しい。

なぜかつての文明が滅び、今がこの様になっているか。その謎を解くため世界を駆け巡る者や、自ら新しいものを生み出そうとする者や、明日すらわからない今日を生きるために走る者達が現れた。

太古と未来を求めて世界をさすらい、古き時代の遺跡に潜り過去の文明の遺産を見つけて人々の生活や空白の歴史を埋める事に貢献している彼らを、人々はハンター、冒険者と呼んだ。

生きるための生活を送っている人達とは対照的に自らの命さえも顧みることなく世界を駆け抜け、ある者は巨万の富を求め、またある者は力無い人々が安心して暮らせる力を求めて、果ての無い虚空の彼方に飛び出すための翼を求める者や自分の存在を誇示するための戦いを求める者。様々な命知らずの思惑が交錯し、それによって作られた道に乗りこんだ冒険者達が、空を、海を、大地を、宇宙を、信念と言う名の武器と乗り物で渡り歩く。

これは、そんな時代の物語。そしてまた一人、見たこともない世界に惹かれ、その世界を駆け抜けるために飛び出した少年から、物語は始まる。

1st ACTION ガラクタの海のボーイミーツガール

惑星トラメイ。惑星総面積の八割が海で、陸地は巨大な一つの大
陸とぽつぽつと浮かんでいる小さな島々、そして復元された先史文
明の技術で作られた人口の浮遊陸地だけの星。

この大陸の中央寄りのところには、地平線がかすむほどの広大な
土地に、Lost^{ロスト}以前からの文明の産物のガラクタが堆積して、さ
ながら海の様になっている場所がある。その様子からこの星の人々
はその場所をジャンクオーシャンと呼んでいる。

この場所は人があまり近づかないところなのだが、今このジャン
クオーシャンのほとりに一人の人物が立っている。全身に日よけの
黒いコートをまとい、頭にフードをかぶっているため顔や年格好は
よくわからない。

その人は動くことなくジャンクオーシャンの海面をじっと見てい
た。海はいつものように様々なガラクタが波となって、波打際まで
寄せては返していた。いつもと変わらない見慣れた景色。

その時、海面に波とは明らかに違う波紋が現れた。時間とともに
大きくなっていく波紋を見た黒コートの人は、ゆつくりと海のそば
まで近づいた。海面がもりあがったかと思うと、その中から三人の
人が出てきた。全員がダイバースーツに身を包み顔にゴーグルをか
けた、黒コートの人物より少し小さい背丈の子供達である。

「ロツク兄ただいま」

「お帰り、みんな無事かな」

海から上がってきた彼らを、黒コートの人物はかぶっているフー
ドをとりながら出迎える。

ライトグリーンの瞳に温かい眼差しを湛える目、まだ子供っぽさ
が残る温和な顔つきに少しくすんだ黄色の髪、しかしそれとは対照
的な印象を与える右の頬に入っている深い一本の傷痕、更に特徴的
な頭頂部の大きな耳と、ヒマワリの花の様なオレンジ色の入った黄

色の体毛。そして何がそうさせるかはわからない、不思議と人を惹きつける独特の雰囲気。

それがネコ族の少年である彼、ロツクの姿である。彼らネコ族はいたる所に集落を作り、その集落やほかの町で少数の人々が生活をしている。気ままな生き方を好む彼らはいろいろな場所に移動しては住み着き、そうしていくことで彼らはこの太陽系、モルコース星系全ての有人惑星に住んでいる有名な種族である。

ロツク達はジャンクオーションを取り仕切っている村、オーションガレージの住人である。この村の住人はジャンクオーションの中に潜って使えそうなジャンクを拾い、そのジャンクをこの星の商人やメカニックに売ることによって生活をしている。

ではなぜ彼らだけがそのようなことができるのかというと、無数のジャンクが埋まっているこの海では人が泳ぐどころか浮くこともできない。足を入れた瞬間、ジャンクと一緒に海底まで沈んでしまうからだ。

そのためこの海の中でジャンクを拾い集めるには特殊な装備と特別な泳ぎ方をマスターしなければならず、その二つを持っているのがオーションガレージである。

「よし、じゃあ報告だ。この子達の初めてのダイブはどうだった、エト」

ロツクは自分より頭一つ分背が低い少年に言葉をかけた。エトと呼ばれた少年は後ろに少し下がると、自分よりさらに小さい子供たちの肩に手を置いた。

「上出来だったぜ二人とも。それぞれ目当てのジャンクも拾うことが出来たしな」

「ジャンクの回収もできたのか。二人ともがんばったね。」

ロツクにほめられて、二人の子供は嬉しそうにはしゃいでいる。

オーションガレージで海に潜るのは男が行う。海に潜ることができるのは十歳からであり、それができてこの村では晴れて一人前と認められるのである。

今日ロツクは弟のエトと共に今年で十歳になる子供たち二人を潜りの練習をするために連れてきた。結果は上々で、これなら次から仕事としてここに連れてくることもできると満足していた。

「二人ともよくできたし、ジャンクも拾えたり、テストは合格。今日はこれで帰ろう」

「おう賛成、早く帰ってメシだメシ。ほらお前たち、家に帰るまでが仕事だから帰り支度もきつちりと済ませるよー」

ダイブ用の装備一式をかたづけ、日よけのコートを着ている子供たちを見ながら、ロツクは太陽の方向に顔を向けながらコートポケットからキセルとマッチをとりだし、キセルの中に乾燥させたハーブを詰めてからキセルを咥え、マッチでハーブに火を点けた。これはスモークハーブと呼ばれる民間医薬品の一種で、ハーブの薬効成分を煙として体に取り込む、薬の吸引医療を簡単にしたものである。

ハーブを吸いながら、ロツクは少しずつ下に下がっていく太陽を見ている。太陽の色はだんだんと濃いオレンジ色に変わっていく、もう少しすれば夕方に、さらにそこから二、三時間もすれば夜になる。

夕焼けの光を浴びている時、地面の日光の照り返しも重なって、ロツクの黄色の体毛は黄金色に輝いて見える。ロツク自身は気にしていないが、村の子供たちはこの時のロツクが好きだという。いつか誰かから、子供達がそう話していたと聞いた事を思い出しながら、ハーブを吸い終わりそろそろ出発しようかとした時、ロツクは太陽の中から何かがちらに向かって飛んでくるのを見た。始めは黒っぽい点だったが、点がだんだん近づいてくるたびにその形がはつきりとしてきた。

それは宇宙船だった。細かな所まではわからないが、今年発行された船籍書にはあのような船は乗っていなかったため、新しく発掘されたか建造されたものだろう。この辺りに船が来るなんて珍しいなと思いつながら船を見ていたロツクだが、明らかに飛び方がおかし

い事に気がついてハツとした。墜落していたのだ。しかも自分達がいる所に向かつて。

「みんな、船が落ちてくるから近くのくぼみに体をかくすんだ」
ロツクの声に装備を片づけていた子供たちは一斉にくぼみの中に入って体を小さくして、ロツクは最後に飛び込んでみんなの体に覆いかぶさる様に身をかくした。次の瞬間、すさまじい轟音と共に巨大な船体が頭の上を通り過ぎて行った。船が通り過ぎる際に生まれた突風がロツク達を襲ったが、幸い風以外には何も飛んでこなかった。たので誰もけがをする事はなかった。

しばらくして風が止んだことを確認したロツクは、周りを警戒しながらくぼみの中から出てきて、安全を確認してからほかの子供たちも外に出させる。船の飛んで行った方向を見ると、ジャンクオーシャン近くの陸地に不時着していた。

船の墜落先を確認したロツクは、背中に背負っていたボードを地面に置き、インカム・メットを頭に付けながらエトに話しかけた。

「オレはこれから生存者がいるか見に行ってくるからエト、ビートルを任すからお前たちは村に戻ってこのことを伝えておいてくれ」
分かったとエトが答えたのを聞いてから、ロツクはボードの上に乗る、先端に付いているスイッチをつま先で押し込んだ。ボードに微かな振動が走り、内蔵されているエンジンが起動を始める。板の側面の吸入口から粒子を取り込み、圧縮させた粒子を吹き出す事でボードが地面から徐々に浮き上がった。

このボードはRS（ライディングスマート）というLostの時代の産物である。粒子機関によって周囲の粒子を吸収して圧縮し、その粒子を任意の方向へ噴射する事で空間の粒子の波に乗り、浮遊走行を行う。

ロツクがのっているボードタイプは、加速と小回りの利きに強いバランス型のRSで、他にもスティック型やスケート型、カイト型などの種類があり、またこのほかに大型の輸送、運搬用のものや高速走行用のもの、戦闘用など様々な系統のものがあり、それらを

まとめてRU（ライディングユニット）と呼ぶ。

地面から完全に浮き上がった事を確認してから、ロックはボードの後ろにあるボタンをつま先で思い切り踏み込んだ。次の瞬間、ため込んだ粒子が一気にボードの後ろから噴射され、ロックは船の墜落現場に向かって走って行った。

船はかなりの勢いで空から墜落したにも関わらず、その外見には特に目立つようなキズは付いてはいなかった。周りには船に乗っていたと思われる人たちが、約十人くらいで船体の確認を行っていた。さすがに船内までは無事という訳にはいかなかったらしく、彼らの体はあちこちほこりなどで汚れており、中にはすり傷や打ち身のあとが付いているひともいた。

その船から少し離れた所に、白い肌に長身で異性を虜にする様な豊満な体つき、肌の色と体のラインを強調する黒色のボンテージスタイルに、目にはサングラスをかけた一人のウシ族の女性が困った顔をして船を見ていた。彼女の足元には、ロープで縛られた獅子族の少女が座らされており、鋭い目つきと怒りの表情で目の前に立っている女性を見上げていた。

しかし女性は少女の視線を無視して、船の周りや船内をチェックしている作業員たちからの報告を聞いていた。

「外装には航行に影響するような損傷は見られませんでした」

「電装系の方もほぼ無傷ですぞ姐さん」

「リーダー、エンジン回りについてなのですが燃料が空でした。」

墜落の原因はこれです」

「わかったよ、すぐ次の準備をしておくれ。しかし燃料切れで落ちるなんて、笑い話もいい所じゃないのさ。おまけにジャンクオーシャンのすぐそばだなんて、アイツに見つかったら冗談じゃないよ」

「ふざけんな、冗談で済まないのはこっちのセリフよ」

それまでずっと女性を睨みつけていた少女が突然大声で叫び、そのまま女性に対して食ってかかった。

「おや、何か文句でもあるって言うのかいお譲ちゃん」

反対に女性の方は冷静に、と言うよりむしろ冷たく突き放している感じで受け答えをしている。そんな女性の態度を無視して、少女はなおも激しく言葉を並べ立てた。

「大ありだ、言いたいことだらけだよ。ギルドを通さずに、中身を教えられないコンテナと一緒に船に乗せてと言ってきた、それを断りや今度は強引に船の中に乗り込んでハイジャックしやがって。おまけに船は性能試験も終わっていないのに無理やり発進なんかさせて、それじゃ落ちたって当然よ。こんなへんぴな場所に落っこちて動くことも出来ない、それにアタシまで身動きとれなくして。あんな達これから何するつもりなのよ。聞いているのオバサン」

「あ、今何て言ったんだい、お譲ちゃん」

それまで女性は少女の話を上から見下した形で聞いていたが、急に腰をおろして少女と同じ目線になり、今少女が言った言葉を聞き返していた。

「ハン、耳も悪いのか。だったら聞こえるまで何度でもいってあげようか。オ・バ・サ・ン」

パンツ

少女がしゃべり終わった瞬間、女性の右手から繰り出された鋭い平手打ちが少女の頬を叩いた。そして女性は鋭い目つきで少女に少し詰め寄った。

「黙って聞いてりゃ小娘がいい気になるんじゃないよ。私にはフエアーってちゃんとした名前があるんだからね、私を呼ぶ時はフェアー様と呼んでもらおうかねえ」

「バカか、どうゆう風に呼んだってオバサンはオバサンじゃないの。しかも様付けだなんて寒すぎるわ」

パンツ

今度は少女が話し終わらない内に、フェアーの二度目の平手打ちが少女の頬をとらえた。

二度も同じところを叩かれたため、彼女の頬は赤く染まってきた

いたが、フェアーを見るその姿勢と態度は崩さなかった。

「何度も顔ばかり叩かないでよオバサン。跡がついたらどうしてくれるのよ」

「小娘の分際で言うことは一人前だねえ。顔の事を心配するより先に、自分の体の事でも心配したらどうなんだい」

「カラダあ、どこかの歓楽街にでも売り飛ばすつもり？まさかあんなに付き合えとか言うんじゃないわよね。言っとくけどそんな趣味無いわよアタシ」

「私だってそんな趣味無いわ、全く口の減らない小娘が。確かに売ってやろうとも考えたけど時間がかかるからねえ、もつと手つ取り早い方法をとろうとしてるわけよ」

何をするつもりかと少女がフェアーに聞こうとしたとき、工具箱を手にしたメカニツクの男性がフェアーを呼びながら近づいてきた。フェアーが話を続けるよう合図をしたので、メカニツクはそのまま話を進めた。

「電装品をバラしている時間はないので中にある手で持ち出せるものだけ今外に出しています。そろそろオーシャンガレージの人間が来ると思われますからお急ぎを」

「わかった。全員で持ち出せるものを持って、すぐにここから離れるよ」

「ちよ、あんたら人の船からものを盗ろうつての。何考えてんのよ」

メカニツクとフェアーの会話を聞いていた少女はすかさず抗議の声を上げたが、フェアー達はまるで気にも留めずに作業に入ってしまった。あまりにも簡単に無視されたため少女も引き下がらずにフェアー達に怒鳴り続けた。

「こら、人を無視して勝手に物盗るなこの泥棒ども。アタシの船と中の物返せ。それとこの縄も早くほどけ。いつまで縛ったままにしている気。……ここまで言ってもまだ無視か。誰でもいいから何か言つてよ」

何といつてもだれも来ず、少女も声を張り上げるのが辛くなってきたのか声の大きさがだんだんと小さくなっていく。その間にも船の周りでは作業が続いていて、船の外にいろいろな物が積み重ねられている。

作業があらかた終わったところで、フェアはまた少女の前にやってきた。

「悪いねえお譲ちゃん、金になりそうな物をたくさんもらっちゃて。ありがとう」

「いや、誰もあんたらにあげるなんて言っていないだろうが」

「そりゃあそうさね。死人に口無し、って昔から言うからねえ」

「……どういう意味よ、それ」

疑問を投げかける少女に対して、フェアは少女の横に立ち、そのまま少女から見えて後ろの方を見ていた。何を見ているのか確認したい少女だが、頑丈に縛られていてうまく動けない。そしてフェアはそのまま何かを見ながら少女に話を続けた。

「このジャンクオーションの近くにはオーションガレージと言う村があつてね、その住人達は何代もかけてこの辺りを開拓していった、つまりここら一帯はその村の土地になるんだよ。それでここで何か異常があればその村の守人がやつてくる。私たちはそいつが来る前に持てる物をもってとんずらしようってわけだ」

「何で逃げるのよ」

「こんな所見られたらさすがに言い逃れができないからねえ」

そう言ってからフェアは、先ほど戻ってきてから手に持っていたものをいじり始めた。黒光りする円柱の先端に細長い柄、小さなハンマーである。

「で、その守人が来る前にここから離れるとして、アンタは邪魔だからここに置いて行くけど、そうすると今度は守人がアンタから話を聞いてこつちの事を知るだろうから結局足がついちまう。だからすまないけどアンタにはここで死んでもらうのさ」

そう言ってからフェアは少女の前に回り込んで少女を見据えた。

少女もフェアの目を正面から見返す。

その目が持つ強さに、フェアは若い奴には珍しいと内心思い、似たような目をするオーシャンガレージの守人である少年の事を思い出しながら話を進める。

「とりあえずこれで頭をやつてから船のブリッジにでもアンタの体を放り込んでおけば、不時着の時に何かで頭を強く打つて死んだと言う状況は作れるから、しばらく時間が稼げるわねえ」

「逃げるために人一人殺すんだ、そこまで悪い人には見えなかつただけだね」

「あそこの連中にはいろいろ借りがあつてねえ、もうなりふり構つていけないのさ。それにこれには私の事をオバサンと呼んでくれたお礼も入っているんだよ。本当は後ろのジャンクオーシャンにでも叩き込んでやりたかったけど、船だけあつて人がいないじゃおかしいからねえ」

氷よりも冷たい目でこれから自分がする事を淡々と話すフェア、その話を聞いている少女は無表情のまま黙りこくっている。その態度が癪に障ったのか、フェアは目を細めると小さく舌打ちをした。「少しは抵抗するとか命乞いでもするものじゃないかい。ま、静かに逝きたいつて言うのならそれでも構わないけどねえ。せいぜいお祈りをしておきな」

そう言つてハンマーを振り上げるフェア、その顔には嫌悪感が少し含まれている感じがある。そしてフェアがハンマーを振り下ろそうとした瞬間、今度は少女の方が顔に笑みを浮かべた。

「祈る相手がいないし、そんなことする必要無いよ」

次の瞬間、少女が動いた。彼女を縛っていたロープが音もなく解け、少女の左手が空を切るフェアの手首を掴む。驚くフェアが正気に戻る前に、少女は右手でフェアの腹部にフックを当てた。

突然のカウンターを受けてうずくまるフェアの横を、少女は座った姿勢から飛び起きて一気に駆け出し船に向かう。一方のフェアも痛みをこらえながら立ち上がり、声を張り上げて仲間を叫んだ。

「小娘が逃げた。そっちに行つたぞ、捕まえる。捕まえたら私の所まで連れて来い。私の手で……」

「あんたの手でどうするの、フェアー姐さん」

フェアーが全て話し終わる前に聞こえた声。一瞬遅れてフェアーの目の前に躍り出た一つの影。それを見たフェアーは苦々しげに言葉をついた。

「来るのが早すぎじゃないかい、ロック」

フェアーの目の前に立っているのは、先ほど子供たちと一緒にジャンク取りをしていた、オーシャンガレージの守人でもあるロックだった。彼は今、着ていたコートのそで口や裾をまくり上げ、さらに全体的にしぼることによってジャケットの様にしている。コートの際に見えなかった下の方は作業用に丈夫に作られているジーンズをはいており、何が起きてもすぐ対応できるよう、身軽な服装になっている。

「すぐ近くにいましたからね」

ほんの二言、三言の会話のだが、二人の間には言いようのない緊張が走っている。いきなりの乱入者に船に向かって走っていた少女も戸惑い動きが止まったが、それよりも船を漁っていた作業員たちの方が慌てふためいていた。ただ事ではない周りの様子を見て、少女はあれが話に出ていた守人なのだと推測した。

「船が落ちてきたようですけど、あれ、姐さん達の船じゃないですよ。借りたの」

「船なんか借りれるか、買ったのよ」

「よく言いますよ、自分の趣味のせいで自由にできるお金あまりないくせに。で、本当の所は」

「ハイジャックよ。アタシの船に無理やり乗り込んできたんだそのオバサン」

ロックとフェアーに向かって大声で叫ぶ少女。それを聞いてまたかという顔をするロックと小さく舌打ちをするフェアー。しばらくしてからロックがまた話しを始めた。

「姐さん、いい加減にしないといくらあなたも腕のいい運び屋だからって、そのうち首に賞金つけられますよ」

「わかったわかったよ。で、私たちは帰してもらえるのかい」

簡単に帰せるかと言いたいロックだが、船の状況が分からない以上話を続けることもできないため、小さくため息をついてから話を続けた。

「船と船の中身に手をつけずに帰れば何も言いませんよ」

「ちよつとアンタ、何勝手に人のものについて話をしてんのよ」

「私はあの小娘にも用があるんだけどねえ。あいつは譲ってくれないかい」

「どつちも勝手に話をするな。でもアタシもあんたとは話をつけたいところだ、こいや、オバサン！」

フェアーの言葉に反応した少女はそのままフェアーに近づき、フェアーもロックのそばを抜けて少女に向かって歩いて行く。ロックは二人に止まるよう声を出したが、彼女達は静止の言葉を無視して互いに拳を握りしめ、もう少しで殴り合いが出来る距離に達する所まで入った。

「いい加減にしろ！」

その時少女とフェアー兩名の間に割って入って、ロックは大声で動きを制した。その両手にはいつ取り出したのか、APR（アップル）とロッドを装備しており二人に対して構えていた。

APRとは籠手とランチャー砲をあわせた武器で、ロックが装備しているタイプは粒子機関を用いて空間の粒子を取り込みプラスマ化させ、それを弾にして撃ち出すエネルギータイプの武器で、主にRW（ライディングウェポン）やCA（コンバットアーマー）と言った機械や兵器と戦うための物である。

もう片手に持っている杖は魔道戦用のマジックロッドで、金属で作られた本体に淡い紫色の魔石が先端にはめ込まれており、そのまわりには長細く伸びている穂先が付いている。さらに本体の所々にはエッジ加工が施されており、刀剣類に対する受け止めに強くして

いる。

「けが人の救護に来たつもりだが、双方が争うというなら話は別だ。船とその乗組員たちはこちらで預かる、姐さん達は自分の荷物をもって帰ってくれ」

鋭い眼光で二人を見据えて厳しい語調で話すロック。構えられているランチャーの銃口にはエネルギーが、杖の先端には雷がそれぞれほとばしっている。ロックには隙がなく、それが間に入られた二人の動きを完全に封じ込めている。

一触即発の三人の空気を一番最初に破ったのはフェアーであった。構えをとり、両手を上げながらフェアーは二人に話した。

「わかったよ。今日のところは私が引いてあげるよ。でもロック、その小娘にはコケにされた礼があるからねえ。今度会ったらお前がいても容赦しないよ」

それまでロックは構えを崩さなかったが、フェアーのその一言で彼女に向けていた杖を引いた。

「今引いてくれるなら構わない、先のことは次に会った時に考えてくれればいい」

そして一言おいてから、ロックは笑顔でフェアーに一言いった。

「ありがとう」

「あ、あんたの顔を立ててやったただだ、礼なんか言っんじやないよ」

顔面が紅潮させながら、フェアーは全員に引上げの指示を出し、そのままロックと少女が見ている中、船から離れていった。

彼女らの姿が見えなくなった事を確認してから、ロックは少女に向けていたAPRをおろす。その瞬間、二人のやり取りを見ていた少女から苦情の言葉を浴びせられた。

「ちよつと、いきなり出てきた人が何で勝手に話を進めているのよ」

「オレは墜落してきた船と乗組員を助けに来たんだ。あんたらの決着がつくまで待っていられなかつただけだ」

「船？あの船はアタシのだけど、乗ってるのはアタシだけよ」

「！あの大きさの船を一人で使っていると、……言うのですか」
その話が信じれずに少女の方を振り向いたロツクは、初めて少女を正面から見て、不覚にも言葉を失いかけた。

透き通る様な金色の髪に頭頂部から生えているネコ科の耳、髪より少し色の落ちる金色の体毛に先端に毛が束なつて膨らんでいるシツポ。

服装は、赤みの入った黒色の金属繊維製のアーマーウェアに同じ素材のスパッツ、その上から部分的に金属片を縫い付けて防御機能を高めた空色のアーマージャケットと、そろいの色のホットパンツ。ファスナー式のアーマーウェアで、彼女の体にピッタリとフィットしているため体のラインがはつきりと見える様になっている。

さすがに成長期の少女であるため女性の体とはまだ言えないが、適度な膨らみのある胸やくびれが由来始めている腰など、少年のロツクにはそれだけでも刺激的だった。

しかしロツクが一番驚いた原因は、彼女の目を見た時だった。自分と同じ年位の少女は、顔にはまだあどけなさを残しているが、ネコ科特有のつり目がちの目の中の、エメラルドグリーン色の瞳に宿っている光はどんな困難に突き当たっても前に進む揺るぎない意志と決意、そしてそれを実行するための行動力を秘めている、ただの子供には出す事のできない力の輝きを待っていた。

ロツクも村の守人という立場上、良くも悪くも様々な人との出会いを体験している。それでも目の前の少女と同じ目をした人とはロツクは数人しか会った事しか無く、会った人たちは全て自分より年上の人たちであった。

だからなのか、自分と同じ年頃の少女の瞳の光にロツクは言い表せない魅力を感じていた。はつきりとした理由はないがロツクは彼女に惹かれていた。

「何、人の顔ぼんやりと見て」

「え、あ、いえ、あの、あ、あの船、本当に君ひとりで動かして

るの」

突然動きの止まったロツクに声をかける少女。その声で我に帰ったロツクは、今考えていた事が顔に出ないようにしようとしたが、意識をしすぎたためにかえって言動がおかしくなってしまった。

そのあわてぶりがあまりにもすごいので、見ていた少女は思わず吹き出してしまった。そのまま笑う少女を見て、ロツクもつられて笑い、二人でそのまま笑い続けた。

ひとしきり笑った後、ロツクは少女に向かって改めて話し出した。「僕はロツク、ロツク・ラジファスト。オーシャンガレージで守人をしている、見ての通りのネコ族です」

「ご挨拶どうも。アタシはリーンカーラ。獅子族でハンターします」

「ああ、何か似てて違うと思っていただけどライオンか。……ん、リーンカーラ」

彼女の自己紹介を聞いたロツクはその名前に聞き覚えがあった。記憶の中身をひっくり返して必要な事を引っ張り出すと、改めて彼女の顔を見直す。

「思い出した、リーンカーラ。最近話題の少女ハンター。4年前にデビューしてから大小様々な遺跡を主に一人で制覇。先史文明の貴重な財宝や遺産を発見、若くしてベテラン勢の一人に名を連ねている。あなたがそのリーンカーラさんか」

「何、ただの守人のわりには随分詳しいわね。アンタどういう人」
「冒険者目指して鍛えていますから。だからそつち方面の情報も結構持っていますよ、リーンがつ、……… すいません」

少女の名前を呼ぼうとして、思わずかんでしまったロツク。あまりに恥ずかしそうに謝るその姿に、また少し笑う少女。

「名前が長いから仕方ないわね、好きに呼んでくれていいわよ。親しい人はリンとか呼ぶけど」

そう言われたロツクは、少し照れ笑いを浮かべてから考え出した。彼女に会話の主導権を取られた気がしていたため、そのまま彼女の

言っていた名前で呼ぶのも面白くないと思ったからだ。

「それじゃあ、リカルさんと呼んでいいですか」

少し考えてロツクは、彼女の名前の初めの部分をもじった呼び名を使った。少女はしばらく何かを考えていたが、すぐに一人で納得をした。

「えっと、気に入らなかったかな」

その様子を見ていたロツクは、やや自信なさげに少女に声をかけたが、少女は首を横に軽く振ってこたえた。

「そんなこと無いわよ。呼び方はそれでいいけど、他人行儀は嫌だからさん付けはやめて、普通に話してくれない」

「あ、うんわかったよ、じゃありカル、ケガとかしてない、あと船をどうするの」

ロツクに聞かれて、リカルは自分の体を触ったり、服のそでをまわったり服の中を見たりしながらケガの具合を見ていった。

「ま、あちこちぶつけたから打ち身やすり傷とかあるけど、アタシは大丈夫そうね。問題はあっちの方かな」

そう言ってリカルが振り向いた先には、墜落した船が横たわっていた。船に向かって歩き出すリカル。ロツクもそれについて一緒に歩く。

「高性能の船が発掘されたって聞いたから高いお金出して買って、これから試験飛行と内部のチェックをしようとした時に、あのオバサン達が突然乗り込んできてさ。動かし方も分からないのに無理に飛ばしたからメチャクチャになってここに落ちたのよね。こいつ、すぐ直る位のキズならいいんだけど」

悲しそうな顔で船に手を置くりカル。船体には大きな損傷は見当たらなかったが、かなりの勢いで落ちたのだから、機関部やコンピュータ類はどうなっているか分からない。リカルが落胆するのも当然だろう。

だが次の瞬間、リカルは顔を上げると船の扉の所まで歩きだして、船の中に入ろうとした。

「中を見るの？」

「エンジンが生きていればもう一度飛ばせるかもしれないしね」

「エンジン見てわかるの」

「一人の時が多いから、たいがいの事はできないとね。そういう事を聞くあんたはどうなの」

「機械は好きだから、多少はわかるよ」

「ふーん、それじゃ一緒に来てよ。人が多い方がいいからね」

そうリカルに誘われ、ロックも素直にそれに応じた。自分を監視するためについてくるよう言われたことを分かっていたので、ロックはリカルの前を歩きだした。

自分の前を歩くロックの後ろ姿を見ながら、リカルはこの少年について考えていた。

守人と言うからには戦う事が専門で、先ほども自分と女性が掴み合いを始めようとした時、間に入ってきた時の眼光の鋭さは覚えていた。しかし彼自身はそういったものとは無関係な性格をしている様にも感じる。

それは自分の思いすごしかもしれないが、守人としての彼より今の彼の方が自然な感じがするからだ。先ほどの連中のようなアウトローに恐れられている一方、今の彼からは周りにいる人を安心させる例えようなない雰囲気が発せられている。

そのギャップの大きさとそれ以上の存在感。それを自分と同じ年頃の少年が出せる事に、リカルは興味を示した。包み込むような優しさで大切なものを守り抜く力、時に自分から渦中に飛び込む行動力。

それは人生を無駄なく長く過ごしてきた人が出せるモノ。少なくとも自分達の年齢で出せるものではない。

それを目の前の少年から見出したリカルは、自然とロックに対して関心を持つようになった。特に、彼の出す一緒にいて安心できる雰囲気は、常に一人で行動しているリカルにとって心地よいものもあつた。

「悪くない、って言うか結構好きかな」

「ん？何が好きなの」

リカルの声を聞いて聞き返すロック。そのロックの声に気付かないまま続けて話すリカル。

「さっきのロックって男の子」

その瞬間聞こえてきた、何かを吹き出す音と何かがどこかにぶつかった音で、リカルは我に返り音のした方を見ると、ロックが額をさすりながら立ち上がってきた。相当驚いたらしく、シッポが大きく膨らんでいた。

そこで初めてリカルは、自分が考え事をしているうちに機関室に来ていた事に気がついた。

「さっきから動きが悪いと思っていたら、そんなこと考えてたのかよ」

そう言いながら目の前のエンジンの色々な所を調べているロック。それを見てリカルも手伝おうとしたが、もう終わるからとロックに言われて触るのをやめた。周りの音がなくなると、不思議と先ほどのやり取りを意識してしまう。何とかして空気を変えようとしても、すぐに気の利いた言葉も出てこず考え込むリカル。するとロックからまた話しかけられる。

「今の冗談だよね」

この言葉に、リカルは即答できなかつた。なぜなら本心から出てしまった言葉であるのでキツパリと否定する事が出来ず、かといって場の気まずさも感じているため肯定も出来ない状況になっているからだ。

「そ、それより船の方はどうなの。飛ばせそう」

悩んだ末にリカルは、ロックの質問に答えずに強引に話題を変えようとした。ロックも深く追求することはせず、聞かれたことに答えた。

「とりあえず、燃料が空じゃ落ちて当然だよ。エンジン本体や航行用のプログラム自体は墜落のショックでも壊れていないや。今

の状態なら星の中は普通に飛べるんじゃないかな」

「燃料が空？そんなこと言ってもアタシは船に燃料入れてないけど、それでもちゃんと飛んでたよ」

「そりゃね、この船のエンジンが粒子波動エンジンだからだよ。知ってる」

始めは話がよく分からなかったりカルだったが、その名前を聞いてようやく納得した。

粒子波動エンジンとは、Lost以前の先史文明にて一番最新の動力機関だとされているもので、原子や分子も含めた空間中の粒子を取り込み、これらを反応室と呼ばれる場所に集める。そこには特殊な力場が展開されていて、そこを粒子が通過する際に生まれる波動を取り込んでエネルギーとするエンジンである。

最大の特徴は燃料として物質を極力消費しないクリーンさと、空間に流れが存在する限りそれをエネルギーとする事が出来る点で、時間の流れもエネルギーにできるため理論上では世界が存在する限り動き続けるエンジンとされている。

非常に高性能な反面、製造や維持にかなりのコストがかかり、エンジン本体や実装機の発見件数も百に満たないレア物である。

実はリカルは発掘された船を気に入ったという理由だけで、中を見ず即購入していたのでこの話ですごく得な買い物していた事になる。

「掘り出してしばらく置いておいたから、その間にエネルギーが貯まっていたのね」

「そういうことだね。よし、ここはこれで出来た。次に行こうか」
そう話してから二人は船を飛ばす準備のためブリッジに向かった。ブリッジに着いてから、ロックは通信機器と電装系、船外の監視カメラのチェックを行いながら、インカム・メットの通信機でどこかと連絡を取り、リカルはエンジンの遠隔操作と航行プログラムの立ち上げを行った。二人とも先ほどのやり取りのせい作業中は全く無口になっていたため作業はすぐに終了し、飛ぶための燃料が貯ま

るのを待つため、リカルは艦長席のイスに座り、ロツクは艦長席のデスクの平面な部分に寄り掛かる様にして腰をかけた。

船外カメラのモニタを見ながら、ロツクは自分のシツポを手に取りブラシを取り出すと毛並みを整え始めた。さっき驚いた時に毛が逆立ってしまった、落ち着かなかつたからである。自然に好きと言われた事もそうだが、ロツク自身彼女に興味を持っていたので、あの一言でつい動揺してしまった。

シツポの毛づくろいを終わらせたロツクの顔の前に、リカルがひよいと顔を出してきた。目が合つて一瞬ドキッとしたロツクだったが、顔には出さずにリカルから視線をはずしてモニタを見直した。

「ねえロツク、使い終わったならそのブラシ貸してよ」

「貸してって、今使ったばかりのだよ。自分のは持っていないの」

「アタシのブラシは部屋の中だから、さすがに今は探せないわよ」

「女の子ならそういう所はこだわると思っただけだな」

「そんなこと気にしていたら、ハンターなんかやってられないわよ」

そう言っているリカルを目だけでみてから、ロツクはしぶしぶ自分のブラシをリカルに貸した。ありがとうと短く礼を言ってから、リカルは借りたブラシで髪をとかし始めた。

その後また続く沈黙。初対面の二人のため共通する話題もなく会話が続かない。しばらくして髪をとかしながらリカルがロツクに話しかけてきた

「船、あとの位で動くようになるの」

「エンジンをアイドリングさせたから、もう少しで飛行用のエネルギーが貯まるよ。十から二十分位かな」

「その後、ロツクの村に行くのよね」

「迷惑かもしれないけど、身柄を預かるという事で姐さん達を追い返したからね。形だけでもつけないと後々面倒な事になるから。だから少し時間をとらせてもらおうよ」

「構わないわよ。船がこうなら町や村に連れて行ってもらう方が

いいから。それにオーシャンガレージは目的地の一つだから、ちょっといいしね」

「村に用事？機械でも買いにきたの」

村が目的地と聞いて、ロツクはデスクから降りてリカルの方に向き直った。ロツクの村はサルベージした機械を直し、それを売って主な収入源としている。そのため来る人の大半は機械を買い付けに来る商人か、彼らを通さず直接機械を買いにきたハンター、冒険者達である。

「ううん、村長さんとお話がしたいのよ」

「うちの村長と話？」

その言葉に頷くリカル。彼女と対照的にロツクは、険しい顔で腕を組む。

「多分無理じゃないかな。うちの村長、一見の相手には会おうとしないから」

「ええ、何で。そういう人たちって大体旅人には会ってくれるもんでしょ」

ロツクの言葉に荒い口調で詰め寄るリカル。それを聞き、ロツクは静かに話を続けた。

「ここ最近、村に野盗やアウトローが攻め込んできてさ。村長その対策のために見ず知らずの人を村にすぐ入れない様にしたんだよ。誰かの紹介があれば別だけど」

「そんなもんないわよ、聞いてもないもん。いきなり門前払いだなんてあんまりじゃない。ねえ何とかならないの」

リカルの剣幕に押されて少し後ずさるロツク。そのロツクをさらに追い詰めるリカル。やがて落ち付けというジェスチャーでリカルをなだめたロツクは、改まった態度でリカルの顔を見た。

「じゃあ村長に会いにきた理由を教えてよ。そうしたら僕が村長に紹介してもいいよ」

「本当に」

「あなたは悪い人に見えないからね、理由がちゃんとしてれば大

丈夫でしょう」

そう言われてリカルはロックの顔を見ると、軽く頷いてから話を始めた。

話の始めは一月前、前の仕事を終わらせたリカルが次のターゲットを探すために古文書を開いている時、偶然開いた本に載っていたものが原因だった。そのページの挿絵には、幾何学的な紋様とICチップの走査線の様なものが刻まれており、遺産についての文章が書かれていた。そしてリカルは、ハンターであった師匠のもとから独立するときに餞別としてもらった物が、この絵の物にそっくりだったことを思い出した。

リカルはすぐに昔もらった物を引っ張り出してきて、本に書かれている事とその特徴を見比べる。そして自分の持っている物が本に載っている物と同じことがわかったら、その遺産に関連する資料を集めて詳細な情報をまとめる。同時にすぐ旅立てるよう準備も行き、数日後に滞在していた町から出て今に至る。

「で、これがその鍵らしいもの」

そう言ってリカルが取り出したものは、ガラスのように透明でガラスより硬い物質のプレートに、様々な線が刻まれている物だ。ロックは直接それを手にする事はしなかったが、少しの見落としも無いよう注意深くそれを観察した。

「すごく透明だな。アクリルやガラスじゃないし、クリスタル？いや、クリアマタルか……」

「中々の洞察力ね、でも全部ハズレ。このプレート、精霊石の加工品よ」

「精霊石？透明なものは滅多にないのに。しかもこんな複雑な加工をしてある物なんて、これだけでも十分価値があるよ」

話をしているうちにだんだん興奮していき、ロックは思わずプレートに手を伸ばしたが、すぐにリカルが自分の手を引っ込めた。アツと顔を上げると、リカルがニヤニヤしながらロックを見ていた。恥ずかしい所を見られたロックは、頭をかきながらデスクに顔を乗

せる様にしゃがみ込んだ。

「で、その鍵は一つだけなの」

「まだあるわよ。アタシは今まで三つ集めたの。その内の一つはこの星の空の守護者からもらった物だけだ」

「浮遊島群の責任者か。よく持ち主がわかったね」

「この手の物は土地に安置されている物が多いから、この星には陸海空の守護者が代々それぞれの土地を見ているって聞いたからあたってみたら大当たりでさ。次は陸の守護者に会おうと思ってここまで来たの」

「なるほどね、確かにうちの村長は大陸の守護者だから」

「ま、これがアタシが村を訪ねる理由だけど、約束にウソないよね。ちゃんと村長さんに紹介してくれるよね」

「そんなにアコギじゃないし、約束はちゃんと守るから安心してよ」

そう言うてにつこりと微笑むロツクを見て、とりあえず彼を信用しようとしたリカル。彼女もつられて微笑んだが、ふいに申し訳なさそうな顔をして、耳を垂らしてうつむいた。

「うにゃ？どうしたの急に」

「こんなに色々してもらっているのに、お礼できるものが何にも無いのよね」

大した理由じゃないなと思ったが、過ごしてきた環境で物の見方が変わるという事を知っていたので、ロツクは気にしなくていいよとだけ言った。

ロツクの言葉を聞いて、リカルは目線を少し下に落として考え事をしていたが、急に顔を上げると自分の服のファスナーに手をかけて、そのまま少し下に引き下ろした。

リカルを見ていたロツクは、突然の出来事に固まってしまったが、彼女が後ろ髪に手をまわしたところで我に返ると立ち上がり、大声で叫び出した。

「ちよっ、お前何やってんだ」

「え、ああ、現金とかあまりないから代わりにと思ってた……」

「そんなのいいから、服を着直せ。自分の体はもつと大事にしろ」
「何言ってるの？あげるのはこっちよ」

そう言いながらリカルは首から下げていたペンダントを取り出してロツクに見せた。何が何だかまだよく分からない状態でロツクはそれをうけとった。

それは純金の土台に大粒のブラックオニキスをはめ込んだだけの飾りつけのない造りの、しかし高価そうなものである。

「大切にしていた物だけど、いい額になるはずだから受け取って」
「え、ああ、そう。でもそういう大事な物をもらうの、いい気がしないな」

リカルの言葉にロツクは答えながら、手に持ったペンダントを見る。それを見ていたリカルは、人の悪い笑みを薄く浮かべてロツクに少し近づいた。

「それじゃ何がほしいの。やっぱりアタシが欲しいのかなー」

「いやだから、本当にそんなんじゃないよ。さっきのモただ見間違えただけだから」

「結局男の子ってそう言うのが好きなのね。ま、魅力があるって言われるのも悪い気はしないけど」

リカルの話を聞きながら、ロツクは顔を赤くしながら違う違うと言いつづけている。その反応をみて、リカルはクルルと小さくのを鳴らす。そしてロツクとの距離をさらに詰めると、トドメとばかりに質問を投げつけた。

「で、あなたはアタシの事どう思ってるの」

「ばつ、どうって初対面の相手の事どう思ってるかって、んな事本人に向かって言えねえよ。そんな、恥ずいし」

そう言いながら火が点いたように顔を真っ赤にして、ロツクは混乱している頭でしどろもどろと拙くしゃべる。

それを見ていたリカルは、ロツクの予想以上の慌てぶりをたっぷりと楽しんだ後、大声を出して笑いだした。この時初めてロツクは、

自分が彼女にからかわれている事に気がついた。

正気に戻った事で落ち着きを取り戻したが、目の前の少女はそれでも笑い続けており、今度はふつふつと怒りが込み上げてきた。そして、こちらにお構いなしで笑い続ける姿についてにキレたロツクは、バンと目の前のデスクを握りこぶしで叩きつけた。

「そんなに笑う事無いだろ。いくらなんでも初対面の女にそこまです恥をかかされる覚えは無えぞ」

「黙っちゃいない？押し倒してみる」

ロツクの怒声を気にせずリカルは自分の胸の辺りに手を置くと、今度は含みのある笑みでロツクに答える。

ロツクはさらに言葉を続けようとしたが、彼女のペースに乗せられそうになったので、言葉を飲み込んで彼女に対してそっぽを向いた。リカルは相変わらず喉を鳴らしながらロツクを見ていた。

「やつぱりそつちのしゃべり方が素の方ね。普通に話してつて言ったのに」

その言葉を聞いたロツクは、ゆっくりとリカルの方へ顔を向けた。目の前の彼女は目を細めながら耳をゆっくり動かし、イタズラが成功した時の子供の様な表情でこちらを見ていた。

ロツクは彼女に完全にやられた事を認めだが、それを態度に出さずに彼女を見た。

「初対面の人に素の態度じゃ悪いと思っただけだ。しかし本気にさせるのにあそこまでするとは、なかなか出来ることじゃないな」

「ハンターなら、相手の本音を引き出す位は出来ないよね」

リカルは自分の腕を組みながらロツクを見て、その態度と言葉に半ば呆れを感じていたロツクは力の無い曖昧な笑顔をしながら、大したもんだよと言葉を発した。

それと同時に船の後部から、エンジンが作動を開始した事を告げる大きな音が聞こえてきた。ロツクはもう一度リカルに自分達の村に来てもらう様に話をした。リカルもそのつもりだったので、船を使いロツクの案内で彼の村まで行く事になった。

二人で操作パネルを動かし船を離陸させ、針路をオーシャンガレ
ージに取った。ロツクは船に初めて乗った事がうれしくて、窓から
外を見てはさかんに喜び、それを横目で見ていたリカルは子供ねと
呟きながら船の舵を取っていた。

1st ACTION ガラクタの海のボーイミーツガール(後書き)

2nd ACTION 村長と守人

オーシャンガレージの村は、ジャンクオーシャンの北のほとりから北西に五キロほど行った所にあるネコ族の村だ。近くには他に町も村もないため、空から見ればすぐに村がわかった。

船を降ろす場所を探すリカルに、ロックは船の停泊所を教えた。村に隣接するジャンク置場の近くに船を降ろすと、ロックを先頭に二人は船の外に出てきた。

「お帰りなさい、兄さん」

「お待ちしていました師匠。その方が先ほどお話しされた方ですか」

初めに二人を出迎えたのは、ネコ族の少年とイヌ族の青年だった。ロックを兄と呼んだ少年はロックと似た年恰好をしており、少年と一緒に居る青年はロックより少し年上で、腰には長剣をつりさげている。

大体の事情を知っている様なので、リカルはロックがインカムで話していた人達だと推測した。

「じやりカル、弟に今から医者の方に案内させるから一応体を診てもらいな。その間に俺は村長に話をしておくから」

そう言っただけでロックは自分の弟にリカルを医者の方まで案内させた。二人が離れていってからは、ロックは今度は青年と話を始めた。

「それで、フェアーさんはまだ来ていないのですね」

「はい、だいぶ前に村の前を走り去って行くのを見ましたが、それきりですね。暗くなってから来るのではないでしょうか」

「どちらにしてもこれからか。すみませんが警備を固めていただきますか。今日はあの人かなり荒く来るでしょうから」

分かりましたと青年は答え、ロックはリカルとの約束のために村の中に入って行った。

一方リカルは、案内された診療所で身体を診てもらっていた。幸

いな事に墜落事故のわりに十ヶ所程の打ち身とすり傷だけで、治療の方もすぐ終わった。終わってから外に出て、いよいよ村長の所へ行くことになった。

「そうだ、えっと、シリユウさん？」

リカルに呼ばれ、先ほど簡単に自己紹介をしていたロツクの弟のシリユウはハイと短く返事をした。

「あなたと一緒にいたイヌ族の方はどういった方ですか。お兄さんの事を師匠と呼んでましたけど」

「あの人はイギーさんです。昔は放浪の剣士だったのですが、ここで兄に会ってそのまま弟子になりまして、今はこの村の守人の一人になってます」

「それじゃあロツクも剣が使えるんだ。そういう風にはみえなかったな」

「その事がどうかしましたか」

「ネコ族だらけの村にイヌ族だから気になっただけです。気になると言えば、この村あまり大人がいないですね」

周りを見ると子供ばかり目立ち、自分より一回り年上の人があるでいない事をリカルは聞いてみるが、シリユウは小さく反応したきり何も話さずに歩いて行った。

「あ、聞いたら悪い事でした？」

まずいことを聞いたなと思いつぐシリユウに謝ったが、彼はそれに答えず口を閉ざしていた。周りでは子供たちが活発に動いていてとても賑やかだが、この二人からは会話もなく気まずい雰囲気が流れていた。どうしたものかとリカルが考えていた時、ずっと黙っていたシリユウが口を開いた。

「話をされるかまでは分かりませんが、その事は村長に伺ってください」

そう言ってシリユウは一軒の家の前で止まると、リカルに顔を向けた。

「ここが村長の家です」

そう言いながら彼は家の戸をあけ、リカルを先の中に通してから続いて家の中に入った。玄関を入ったすぐ正面に、木製の重厚な造りの、いかにも偉い人の部屋といった感じの扉があり、シリユウはその中の人に来客がある事を伝えた。

「こちらが村長のお部屋になります。どうぞお入り下さい」

シリユウに勧められ、リカルは部屋の中に入った。部屋の中には大きなテーブルが置いてあり、それに向かって椅子に腰をおろしている人物がいた。

ネコ族のその人は、黒色の体毛に赤褐色の髪の毛、引き締まった体に精悍な顔つき、顔の所々には深い傷が走っており、耳たぶには魔道文字《ルーンワード》が刻まれているピアスを付けている。

何とも村長には見えない人だが、部屋の中には彼しかない様だったため、リカルはその人物に頭を下げた。

「この村の村長様でしょうか。私は旅のハンターで、リーンカーラと申します」

「ほう、君がか。話は聞いているよ」

リカルに掛けられた声は、見た目からは予想できないほど静かによく通る声をしていた。少し意外な気がしたが、別に気にはならなかったためそのまま話を続けた。

「本日は村長様にお願いがあり、この村に参りました。私の話を聞いていただけますか」

リカルの話聞いた男は、軽い笑みを浮かべてからリカルの方を向いて小さく頭を振った。

「結構礼儀正しいな、噂とはえらい違いだ。せつかくの挨拶で悪いが俺はただの傭兵、ここの村長はあつちだよ」

その言葉でリカルは、自分の見えない所にまだ人がいたことに気づいた。慌てて数歩前に出て向きを変えると改めてその人に頭を下げた。

「大変失礼をしました。村長様、私の話を聞いていただけますか」
「話は聞いていますよ。とにかくそちらに腰をお掛けになって下

「さい、リカルさん」

その声に姿勢を直そうとしたリカルだが、ある事に気がついた。自分は愛称を名乗ってはいない。しかもそう呼ばれたのはさっき出会った少年だけ。

まさかと思いい顔を上げたりカルの目の前に入ったのは、白地に様々な色の糸で複雑な刺繍が施されているローブを身に纏うロックが、テーブルの向こう側に座っていた。

「ロック、あなたがここの村長さん」

リカルの問いかけに、ロックはうなずきながらゆっくりと答えていく。

「この礼式衣を着ている時は、私はこの村の村長です。改めましてこんにちは、私の名前はルーフォーミュール・ギアトリガーです」
「ついでに名乗ろうか、俺はレイン・バレル。こいつの親父と知り合いで、この村の出身だ。今は交易都市ステップのハンターズキルドで傭兵の取りまとめをしている」

二人の挨拶が終わると、ロックはリカルに席に着くように勧め、三人はテーブルを囲んで席に着いた。

「さて、あなたがここに来た理由は先ほど教えてもらいましたけど」

「はい。村長がお持ちになっているプレートを譲っていただきました。思い足を運びました。プレートは……」

「その前に、あなたが遺産のプレートを集めている理由を教えてください」

理由を聞かれて少し難しい顔をするリカルに、ロックは慎重な態度で質問を続けていった。

「大いなる遺産や禁断の遺産のどれも、公な情報は殆ど出ていない。つまり公開出来ないものが多い事になる。それをメインに調べたい理由を知りたいのです」

話し終わったロックの目を、リカルは静かに見つめていた。それを正面から見ていたロックは思わず彼女を意識してしまったが、彼

女は真剣に何かを考えていたので、彼も表情を変えない様にする事ができた。

「きつかけは、全くの偶然でした」

そう一つ前置きをすると、リカルはロツクに話を聞かせ始めた。それは4年前、彼女がハンターとして独立した頃の話だった。

当時リカルには、入ってみたいと思っていた遺跡があった。そこは他の冒険者によって既に調査が終わっていた場所だったが、リカルはなぜか、ここにはまだ何かがあるという感じがしていた。独立前にリカルは自分の師匠にこの事を話したが、師匠は全く取り合ってくれなかった。そのこともあって、リカルは独立してから一番初めにその遺跡を調べてみた。

元々大きな遺跡でもなく、調べつくされた場所でもあるので、大した時間もかからずに一番奥の部屋までたどり着いた。何かあるとすればこの部屋だと考えていたリカルは、早速部屋を調べ始めた。部屋の中央には台座があり、その台座が上下の可動式である事に気付いたりカルは、台座の上に乗っていた物を外す前に部屋を調べたから何も見つからなかったのではと考えた。

そこで改めて部屋を調べると、普通では気がつかない、わずかな出っ張りが壁にある事に気がつく。その出っ張りを押し込むと壁も一緒に動き出し、リカルの目の前に新しい入口が現れた。

「その先は、また別の遺跡でした。私は時間をかけて遺跡を調べ、最深部にまで辿り着くことが出来ました。そこにあつたものは、いふなれば世界の過去、といつてもよい品物でした。」

「世界の過去？」

漠然としたリカルの言い方が気になったロツクだが、リカルは首を軽く振って話を続けた。

「私が見たものは先史文明の歴史と思われるものです。過去に起きた様々な出来事が記録されていました。中には発達した技術が引き起こした戦争や事件についてのものもあり、その内容はとても今の時代に一般公開する事は出来ないものばかりでした」

「つまり我々では完全に理解できない出来事ばかりだった。それが遺産と呼ばれるものですか」

「宝とか、そういう具体的な物じゃないのか」

リカルのお話を聞いたロックとレインは、確認の意味でリカルに聞き返した。それにリカルは力強く頷いて肯定をすると話を続け始めた。

「もちろんそうだった物品もありましたが、それもどの様なものが分からない分値打ちがありませんでしたね。それからの私は、遺産の中の情報が悪用されないように回収をしています。過ぎた力人は、時代を狂わせますから」

「人と歴史を、か」

リカルの最後の言葉を、ロックは誰かに語るでもなくぼつりと呟いた。その言葉の後しばらく、話の大きさのためか誰も口を開こうとしなかったが、ゆっくりとロックが立ち上がると、部屋の隅の方に歩いて行った。

「しっかし、まだ若いってのにお前さん、よくそんな大変な事をする気になったな。それだけ嬢ちゃんの見た物がすごかったって事か」

感心とも呆れともつかない口調でレインがリカルに話しながら、彼は服のポケットから葉巻を取り出した。

「タバコを吸うなら外でお願いします」

「お前だって吸うだろ、固いこと言うなよ」

「私も吸うときは外でしますよ、子供たちには評判良くないから。それ以前にタバコと薬を一緒にしないでください」

レインと話をしながら、ロックは自分の席に戻り、机の上に何かを置いた。それは正しくリカルが探していたプレートだった。

「このプレートは村に古くから伝わる物です。もし求める物が現れたら、試練の遺跡の奥深くに置かれたこれを持ち帰ってきた時に授ける事になっています」

「試練の遺跡？でもプレートはここにありますが」

目の前にあるものを取ってこいと言うのもおかしい話だと言わんばかりにリカルが聞いてくると、ロックは口調を変えることなくリカルに答えた。

「それは八年前に遺跡から私が持ち帰ってきたからです」

大したことでも無い様な話し方だったのでリカルも聞き流しそうになったが、話の内容が頭に入ってくると、リカルは驚いてロックの方に身を乗り出した。

「八年前に遺跡に入った？一人で。一体アంతタいくつの時よ」

「七つの時ですね。もちろん一人でですよ。先ほどもお話しした様に、私は冒険者志望だから腕試しのつもりでね」

「七つの時って、アタシが師匠の世話になる前じゃない。すごいですね村長」

「その後大人たちに散々叱られましたかね。さて、これをあなたにお渡しするには二つ条件があります。まず一つは、時々でよいので村に戻ってきて、冒険の経緯を聞かせて下さい」

「話すだけでいいのですか」

確認するように聞いてくるリカルに、ロックはそうですと答えた。

「私物を渡す訳ですからね。渡した物がどうなったか知る権利があってもよいと思いますが」

「それはそうですね。分かりました、その件はお約束いたします」
リカルの返答にロックは嬉しそうな顔をして頷くと、イスから立ち上がり着ていたローブを脱ぎ始めた。

「それでもう一つの条件は何でしょうか」

リカルがロックに訪ねると、ロックは脱ぎ終えたローブをイスの背もたれにかけ、そしておもむろにプレートのすぐ隣に片手を叩きつけてリカルに目を合わせた。

「一度オレと勝負してもらおうか。お前が勝ったらプレートはやる、負けたら今回は諦めてもらう。それでどうだ」

突然の事に戸惑うリカルは村長と呼ぶが、ロックは満面の笑みをするとりカルの一言に対して朗らかに答えた。

「今のオレは、冒険者を目指しているロック・ラジファスタさ」

3rd ACTION 対決！

オーシャンガレージの村は住民約五十人ほどの小さな村で、ジャンクオーシャンでサルベージをした機械を直して生計を立てている静かな村である。

ところが今日は、村の広場に人が集まり、まるでお祭りの様な騒ぎになっている。この騒ぎの中心には、村の守人であるロックと流れのハンターであるリカルが、互いに距離をとりながら向かい合っ
て立っていた。

ロックがリカルに対決を挑んだ、このことが村中に伝わるのに対して時間はかからなかった。そしてその対決のための準備も同様に時間はかからなかった。

リカルは村に来た時の恰好に、空弾銃やスティックなどの武器を装備しており、ロックは先程外に出ていた時のジャケットコートにジーンズ、コートの下には腰まで裾の届くTシャツを着て、その上からウエストポーチを腰のあたりに巻いている。ポーチのベルトには色々なものが掛けれるように手が加えられていた。

「では、ルールを説明するぞ」

二人の間に立っていたレインが、ギャラリーにも聞こえる声で話し始めた。

「スタートから日が沈むまでに、守人が持っているプレートを冒険者が奪い取れば彼女の勝ち、反対に時間までプレートを守りきれば守人の勝ち。基本的に何でもありだが、村人を傷つけたらその場で負けになる。このルールでいいか」

レインの説明に、ロックは無言で頷き、リカルは片手を挙げて、それぞれ答えた。

「では両者、位置へ」

「その前に彼と話をさせてくれない」

レインの合図を遮ったりリカルの希望に、ロックは頷いてそれに答

えた。

「ロック、勝負はいいとしてどうしてアンタはこんなことするの」
勝負の話が出てからここまでお膳立てがすぐに出来てしまったため、ロックが勝負を持ちかけてきた理由をリカルは知らないままであった。ロックは質問をしてきたリカルを正面から見ると、自分の気持ちを正直に話し始めた。

「冒険者になりたくて色々な修行をしてきた、そんな奴の目の前に本物の冒険者が現れた。そいつにとっちゃ自分の力がどれだけ世間に、その冒険者に通じるか試してみたくなった。それだけだ」

「男の子ね、憧れのためってヤツ？でもそういった考え方で大けがした人間をアタシは知っているよ。憧れだけじゃ勝てない」

「そうだろね、でもやってみねえと分かんないだろ。それに大切になっている物を譲るなら、そいつのことを知つとかないとな」

話は終わったという風にロックはレインの方を見て、レインもそれに合わせて大きく頷いた。

「では改めて位置について」

レインの言葉を合図に、二人は互いを見ながら後ろに下がり距離を取る。後ずさりしながらロックは杖を、リカルは拳を構えながらそれぞれ位置についた。

「レディ」

二人が位置についた事を確認したレインは大きな声で合図を出す。二人の間に張りつめた空気が走り、周りのギャラリーにもそれが伝わったのか静かになる。二人は揃って姿勢を低くして、いつでも動けるよう相手の動きをうかがっている。

「ファイト」

鋭く告げられた開始の声で、高めていた気を解放した二人は弾けるように動いた。

リカルは一気にロックの所まで距離を詰めると、そのスピードを活かして右の突きを繰り出した。一方ロックは自然な動作で一歩前に出ると、手にした杖でリカルの拳を受け止めた。避けるよりも受

けることでリカルの力を測り、さらに力押しに持ち込むことでリカルに体力を使わせるためである。

その効果はすぐに現れた。すっかりとリカルを受け止めたロツクはそのまま強く押し込む。ロツクに比べて力の無いリカルは押し返す事の出来ない、そこでリカルはロツクが力を込めたタイミングに合わせて体を引いて、そのまま後ろに跳び退いた。

リカルが急に後ろに下がったため、支えをなくしてバランスを崩すロツク。それを見たりカルは腰から空弾銃を引き抜くと、バックステップで離れながらロツクに銃口を向けて三発発砲した。

すぐに体勢を立て直したロツクだが、高速弾に設定された弾はすでにロツクの目の前にまで迫っていた。対してロツクはすぐ左腕を構えると、装備しているAPRで空気を撃った。ロツクの撃ったプラズマ弾はリカルの撃った空気を完全に命中して、両方の弾はその場で消滅した。

その時リカルは、フェイントをかけながらロツクをかく乱して隙が出来た所でプレートを奪おうと小刻みに動き出した。しかしリカルが動き出すより早くロツクが動き出す。

大きく後ろに跳び退くと、そのまま後ろに向かって走り出し人だかりの中に飛び込んで行った。不意を突かれたリカルはしまいかけた空弾銃を構えなおしたが、人ごみの中を小さくなって駆け抜けていくロツクに狙いが付けられず、一瞬の躊躇の後にリカルもロツクを追って走り出した。

人の波をかき分けながら表に出たりカルは、^{スマート}Sボードに乗って走り去っていくロツクの姿を見た。負けじとリカルも腰に下げている伸縮式の^{スマート}Sスティックを取り出すと、それに跳び乗ってロツクを追いかけだす。

そうして始まった、村の道を全て使つての^{ライディングスマート}RSによる追いかけては熾烈なデットヒート巻き起こしていた。

ロツクの使っているボードタイプは、チューニングによって状況に対応させる汎用型、一方リカルの使っているスティックタイプは

最高速度と走行距離の長さに優れた長距離高速型である。直線距離を追うならリカルが有利だが、町中の区画を縦横無尽に駆け抜ける今の状況ではロックが有利である。互いのライドテクニクも互角のため、勝負の行方は一進一退を続けている。このままでは勝てないと考えたリカルはある行動に出た。

立ち乗りしていたスティックの後ろに体重をかけ、向きを上向きに修正してアクセルを押し込み出力を上げるとスティックの高度を上げていく。するとすぐにリカルは周りの家の屋根より高く飛び上がった。一方逃げていたロックが後ろを振り返ると、後ろから追いかけていたリカルが見えなくなっていた。振り切ったのかと思いがながらも速度を落とすことなく、狭い路地に入ってしまった。

上空からそのロックの動きを見ていたリカルは、チャンスとばかりに急加速をかけてロックに近づくと、目にも止まらぬ速さでロックの前に回り込むことに成功した。急に前を塞がれたロックはすぐに方向を変えて逃げようとしたが、飛び込んできたリカルがそのままロックに向かって突っ込んできた。このため向きを変えようとしていたロックは完全に不意を突かれてしまった。

リカルがロックの首に掛っているプレートを掴み取ろうと手を伸ばしたその時、ロックはボードから後ろ向きに飛び降り、自分に向かってくるリカルの目の前に腰のポーチから取り出した煙幕を投げつけた。よけられた上に反撃もされたりカルはとっさに手で目を守ったが、そのせいでバランスを崩してしまい地面に放り出されてしまった。

もうもうと煙の上がっている所に、ロックはポーチから別の玉をいくつか取り出すと、次々と煙の中にそれを放り込んだ。リカルは自分に何かがこびりついているのを感じたが、煙の中で自分がどうなったかが分からない。そうしているうちに煙が晴れていきリカルが自分の周りを見渡すと、白いネバネバしたものが体中にこびりついてとれなくなっていた

驚いたりカルはすぐに立ち上がろうとしたが、体のネバネバのせ

いで身動きが取れない。

「ちょ、何よこれ、ネバネバしていとれないー」

必死になってそれを取ろうとしているリカル。しかし体と地面をくっつけているそれはリカルの力では簡単に抜け出す事が出来ないほど絡みついていて。一人でもがいているリカルがふと前を見ると自分から二、三步離れた所でしゃがみながらこちらを見ているロツクと目があった。

「わー、がっちりくっついてら。量が多かったかな」

「ロツク！あんた一体何したの」

冷静な顔で見ているロツクが憎らしく見えたりカルは、体が動く限りロツクに詰め寄り腕を伸ばした。

「とりもちだよ。獲物の動きを止めるのに使うんだけど、人相手にも結構使えるな」

「とりもちでも何でもいいから、とにかく何とかしてくれない。ベタベタして気持ち悪いし」

「何で、冗談じゃない」

体についたとりもちを早く取りたかったリカルは、ロツクの一言が一瞬信じる事が出来なかった。

「こつちは時間までこれを取らなければいいわけだから、時間になるまでそのまま置いてよ」

「ちよつと本気、それ卑怯じゃない」

「ルールは守っているから卑怯じゃない。これも戦略だよ」

そういうとロツクはゆっくりと立ち上がり、体を縮めて力をためるとバネをつかって大きくジャンプをして近くの家の屋根の上に乗った。ネコ族の特徴は身体能力の高さで、この程度の芸当はロツクにとって朝飯前である。

「じゃ、日が沈むまでゆっくり休んでね」

屋根の上からロツクは意地の悪い笑みを浮かべてリカルに手を振ると、家の反対側に飛び降りていった。

とりもちに包まれながら一人取り残されたりカルは、立ち去る口

ツクに向かつて罵声を浴びせていたが、そのロックもいなくなったのを確認すると、素早くジャケットの袖から腕を抜き、そのまま両腕で腰のあたりをまさぐる。やがて別のスティックを二本取り出すと、それぞれの手に持って起動を行った。

二本のスティックをそれぞれ臨界点まで起動させると、リカルはそれを腰の近くで構えると同時にエネルギーを放出、強力な推進力が生まれ一気に前に出るが、とりもちに体がとられてしまい前に進めない。とりもちが伸びきった所でリカルは更に出力を上げると、体についたとりもちがブチブチと嫌な音とともに少しずつはがれ出してくる。

それに加えて彼女は、体の奥底から出したような咆哮とともに体を様々な方向にひねり出し、そうしてやっとりもちの呪縛を解いた。その時の支えを失った勢いで投げ出される形で空に飛んで行ったが、すぐに手にしたスティックを操って地面に着地した。

「考えは良かったけど、この位でアタシを止めれると思った事が間違いよ」

そう小さく呟きながらリカルは乱れた髪を手で整えると、先ほど自分がいた所に近づいて、脱ぎ捨てたジャケットに手を伸ばした。襟の部分を掴んで引つ張り上げようとするが、とりもちがくっついていてとる事が出来ない。

「あーもう、結構イイ感じに着慣れてきたのに。後で絶対弁償させてやる」

ジャケットから手を離れた彼女は大きく辺りを見渡してから、その場を走り去っていく。その足音が完全に消え去りしばらくして、屋根の上から人影が地面に降りてきた。ロックである。彼は屋根つたいに逃げるふりをしてその場に留まり、リカルに遠くに行ったように思わせたのだ。

「引っかけるのも手、悪く思うなよ」

そう言っってロックはリカルの動きを止めたとりもちに近づくと、ポーチから今度は粉の入った小さなビンを取り出しその粉をとりも

ちに振りかけた。すると粉が化学反応をおこしてとりもちが徐々に溶けてなくなっていく、最後にはリカルのジャケットだけがその場に残った。

「しかしまさか無理やり引きちぎるなんてね。あの場の判断としてはいいけど乱暴だな」

女の子の取る様な行動じゃないなと思いつながら、ロツクはジャケットを拾い上げた。服型の軽鎧に分類されているだけに、きつめの作りにかかなりの重量感を持っている。これを使って別の罠を張ろうかと考えている時、ふと襟の辺りで指が何かに触れた。違和感を感じたロツクが襟をめくってみると、手のひらサイズのケースがついていた。

それを見た瞬間ロツクは周りにすばやく目を走らせ、何も無い事を確認するとすぐにジャケットを投げ捨てようとした。しかしロツクが手を離すより早く、そのケースが破裂した。

ポンと小気味の良い音と共に破裂したケースからは大量の粉が飛び散り、ロツクの体や周囲を白く染めていく。立ち上った粉が薄れてくると、そこには粉まみれになりながら咳き込んでいるロツクがいた。リカルはジャケットを掴んだときに、えりの部分にこっそりとケースを仕掛けていたのである。

リカルの仕掛けにはまったロツクだが、とりあえずジャケットをその場に捨てると全速力で今いる場所から駆け出した。ロツクが走り去ってからすぐ、今度は自分の仕掛けが発動したのを確認したりカルがその場に現れた。ジャケットを拾い上げ、粉やほこりを払い落しながら地面に目を配らせると、舞い散った粉を踏んだロツクの足跡がくつきりと地面についている。

「引つかかったと思わせるのも作戦、このまま追い詰めるわよ」言葉とともにリカルはジャケットを羽織るとすぐにその足跡をたどっていった。しばらく走っていくと、大量の水が辺り一面にまかれていた場所を見つけ、その場所を境にロツクの足跡が見えなくなってしまった。

「粉を落としかか、やるわね。……でも」

そういうとリカルは辺りに注意しながらその付近をゆっくり歩き出した。うろろると歩いてきたがある所についた時に周りとう違う匂いをリカルは感じ、その匂いがする方向へ走りだした。リカルが仕掛けた粉は微弱な香りを放つ物で、たとえ洗い流したとしても一度ついたその香りは簡単には取れない。その香りをたどってリカルが走ると一軒の建物の中に匂いは続いていた。リカルも躊躇することなくその建物の中に飛び込んで行った。

そこは、バーとカフェと食道を兼ねたこの村唯一の宿屋だった。ここに入っただけでリカルは、今まで感じていた匂いが途切れている事に気がついた。店内は料理や飲み物といった様々な匂いが入り混じっており、このせいでマーキングの匂いが消えてしまっていた。

「気付かれたかな」

手がかりをなくし、これからどうするかを考えていると、カウンター側の方から声をかけられた。

「そんな所に立たれると、商売の迷惑になるんだけど」

その声にリカルがカウンターの方を見ると、自分より少し年上の白い体毛と黄色い瞳のネコ族の女性が、カウンターの中でカップを磨いていた。どうやらこの店のママのようである。入り口から離れたリカルはゆっくりママの前まで歩くと、カウンターに片手をついて少し身体を乗り出す態勢を作った。

「ちよつと教えてほしい事があるんだけどいい？」

そう言うのとシツポを軽く揺らしながらなるべく人当たりのいい笑顔で、しかし冒険者らしい態度で話をするリカル。しかしママはリカルの話の聞くとふいと後ろを向き、そのまま棚の整理を始め出した。相手のそつけない態度を見たりカルは、服のポケットから黄色の硬貨を数枚出すとカウンターにおいてブラックのコーヒーを注文した。ママは棚からマグカップを出すと、ポットに入っているコーヒーをカップに注いでリカルに差し出した。

「アタシと同じ位の歳の男の子見なかった？」

出されたカップの中身を半分ほど飲んでから、リカルは改めてママに話を始め、今度はママもリカルの話に答え始めた。

「さあね、同じ年頃したのは何人かいるし、今日も何人か店に来ているから特徴が分からないと」

そう言つてママはリカルの後ろの方を指さしてみる。リカルも顔だけ後ろに向けるとそこは食堂で、様々な歳の子供達が食事や談話をしていた。

「んーと、くすんだ黄色い髪にオレンジがかつた黄色の毛、Ｔシャツにジャケットコート着て首からペンダントつけてて下はジーンズで、あと左腕に銃を付けていたかな」

「ああ、ロツクの事ね。濡れた体で入ってきたかと思つたら勝手口の戸から裏通りに出て行つたよ。素通り禁止だつていつも言っているのにさ」

話を聞きながらもりカルは今見た食道から店の後ろ側を見渡した。食堂の隣には奥に通じる廊下があり、入ってきた入口の脇には二階への階段がある。この店だけでも隠れる所はかなりありそうだが、カウンターに向き直した時のママの顔は嘘をついている様には見えなかった。

コーヒーの残りを飲み干してからリカルは、カウンターの奥隣の勝手口に近づいて戸を開けた。戸を開けるとすぐに、ロツクにつけた匂いが漂ってきたためこの方向が正しい事がわかったが、すぐにママの方に向きなかつた。

「どうして本当の事をすぐに教えてくれたの」

「あの子が大事にしている物をかけての勝負でしょ。だからあなたに勝ってもらいたいよ」

分からないという顔をするリカルに、ママはカップにまたコーヒーを注ぐと今度は自分で飲みながら話を続けた。

「宝物だか何だかは知らないけど、未練になる様なものなら手元がない方がいいもの。あいつが目指している物、あいつがその事考える度にやるせない瞳をする所が見てられなくてね。いつそ誰かに

あげるか捨てるかした方がいいと私は考えているから」

「あいつそんなに冒険者目指しているんだ。でも何で外に出ないでここにいろんだろ」

「それはこの村の都合だから。よそ者がそこまで気にする所じゃないわよ」

そう言われて話をやめたりカルはその勝手口から外に出ようとしたが、振り向くとママに薄緑色の硬貨を弾いて渡し、棚に並んでいるコーヒー豆を一袋、後で取りに来ると伝えて外に出て行った。

代金を受け取ったママは、これが祝杯かやけ飲みどちらかになるのかと考えながら、ボトルキープ用の札に名前を書こうとして名前を聞いていない事に気がついて、少し考えた後に『ライオン娘』と札に書いてコーヒー豆の袋に札をつけた。

薄暗い地下水道の中をロツクは走る。時々曲がり角を曲がっては後ろを振り返り追跡がないかを確認する。リカルの罠にかかってつけられたマーカーを水で落としたが、かすかに匂いがしたので飲食店に潜りこんで料理の香りでそれを隠す事を思いつき、店に飛び込んでから裏口から飛び出てそのまま地下に潜った。

何度目かの曲がり角に身を隠すと、ロツクは数回大きく呼吸をして息を整えた。元々ベテランの冒険者をこの位で振り切れるとは考えていないので、とにかく今はどこかに隠れたかった。呼吸が落ち着いたところでまた走りだそうとした時、ロツクは周りの空気の流れが変わった事を感じ、次の瞬間彼の顔のあたりを何かが猛スピードでかすめていった。

不意を突かれて驚いたロツクはその場から離れようと走り出す。しかしそれより早く、ロツクは背中に強烈な衝撃を受け、そのまま前のめりに倒れてしまった。すぐに立ち上がるうとしたが受けた痛みでせいで身体が思う様に動かない。それでもロッドを支えに立ち上がるが、背中に視線を感じ後ろを振り向くと、リカルが数歩分の距離を取って空弾銃を構えて立っていた。

「よお、思った以上に早く来たな。やっぱりベテランのハンターは違うか」

「素人のくせに手こずらせてくれたのはアンタが始めてよ。さすが鍛えてるだけはあるね」

「褒め言葉と思っておくよ。ついでに言っとまだ負けちゃいない」
背中にまとも弾を受け体はふらついているが、話す声やその目の光は少しも傷ついていない。リカルは感心しながらも厄介な相手だと思った。

「諦めないのはいい事だけど、この状況でどう勝つの。いいえ、どうすれば負けないの」

リカルは銃を構えながら数歩、ロックに近づく。ロックはそれに合わせて後ずさりするが、体の痛み of せいで思う様に動けず彼女との距離を離せず、ついに彼女はロックにあと一歩の所まで来た。

「体がそれじゃアタシの相手は無理よ。」

表情を変えないまでも勝利の確信で声がかもち高くなるリカル。ロックは声を出すことなく彼女を見ている。

「このまま腕を伸ばせばプレートを獲得してアタシの勝ち。どうやって逆転するの」

「……こうやってさ」

そう言つと同時にロックは杖代わりに使っていたロッドの柄の部分で地面を軽く突いた。あわてたりカルは目の前のロックに腕を伸ばしたが、彼女の腕は突然地面からせりあがってきた石の壁に阻まれてしまった。逃げ出そうとするも次々と現れる石の壁に囲まれ、ついに彼女は魔法の石壁に閉じ込められてしまった。

「杖持ちだから用心していたつもりだったんだけどな」

そう言いながら苦々しい顔で周りの壁を触るリカル。当然壁の向こう側のロックにはリカルの表情まで分からないので、彼はしてやったという結果に調子づいた口調で話した。

「駆け引きはオレの方が上だな。魔法の壁は力じゃ壊せない、今度こそ詰みだぜ」

そんなロツクに対して、リカルはなぜか黙り込んでいる。彼はそれを疑問に思ったが、悔しさで声が出ないのだからと決めつけて、ロツドを軽く振ると先端を自分の体に当てた。ロツクの体に電流が走ると、彼が今受けた傷が瞬時に治っていき、終わった時には動かす事も大変だった身体はすっかり元に戻っていた。

治癒魔法で身体を治したロツクはすぐその場を離れる。その足音が遠くなってからすぐ、リカルを囲んでいた石壁が徐々に透き通っていき、最後に小さな音をたてて崩れた。崩れた石壁のあった所には、リカルが手に魔力を込め、壁を壊した姿があった。

「詰めが甘いわね。相手も魔法が使えるか、ちゃんと確認しなきゃ足元とられるのに」

そう言いながら、リカルは空弾銃とスティックを再点検して、右腕に付けているアームガードのはめ込み口に小さな金属の塊を取り付けスイッチを押す。するとその塊はみるみるうちに姿を変え、アームガードと一体化して小型のキャノンになった。

先程の塊はレギオンメタルといわれるナノマシンの集合体金属であり、普段はただの金属の塊だが、特定の電流を流すとプログラムされている物に変形する金属である。

「きつちり追い詰めていかないと、ここじゃ勝てないか」

思った事を口に出すのは彼女自身自覚している癖である。全ての準備を整えてからリカルは一番近くにあるハシゴを見る。

「次で決着よ、絶対逃がさない」

4th ACTION 『終わるまでは諦めねえ』

地面に置かれている金属製の丸いふたが、ガタガタと音を立てる。初めは音だけだったが、それがぴたりと止むと今度はふたが持ち上がり、ぽつかりと丸い穴が地面に出来る。そこからするりと現れる黄色い影。影は穴から出てくると穴にふたをしめ直す。

「何だルーフォ、変な所から出てきたな」

不意に声をかけられ黄色い影、ロツクは振り返り声の主であるレインの方を見る。

「街中でまこうとしたけど駄目だったんで、地下に潜ってまきましたよ」

「そうか。やっぱり本職でベテランの冒険者相手にするのはきついだろ」

「でも面白いですよ、ガチで戦えるシチュエーションは。時間ももうすぐだしこのままいけば……」

勝利を確信してか、足を止めてレインと話をするロツク。しかしロツクが話を続けようとしたその時、突然大きな爆発音が村中に響き渡る。驚いて音のした方を振り向くと、何かがものすごい勢いで空に昇っていくのが見えた。目をこらしてそれを見ていたロツクが、金色と空色の何かと認識できた時点でそれは動いた。左腕につけた小型の砲門をロツクに向けると同時に声を上げる。

「クリスタルスパイク、トリプルファイヤ」

声と同時に先端に光が集まり、次の瞬間透き通った水色の光が三発、ロツクに向かって飛んできた。とっさにレインを突き飛ばしたロツクの周辺に着弾したそれは急激に形を変え、とげのついた三つの巨大な水晶の山となって、ロツクを囲むようにそびえていた。

「おーいルーフォ、大丈夫か」

「レインさん下がって。僕のに巻き込まれる」

細かな水晶の破片で視界が悪くなったが、ロツクは突き飛ばした

レインからの声に返答をしながら水晶の魔法が飛んできた方向を見るとAPRを構え、弾を機銃タイプにしてトリガーを引いた。

地下水道で戦闘準備を整えたりカルは、腰から引き伸ばし型のスティックを取り出してまたがり、マンホールの下に立つとエネルギーを溜め始めた。スティックのパワーが臨界まで高まった所で、リカルは素早く右手で銃を取り出すと真上のマンホールを撃つて吹き飛ばし、蓋が開いた瞬間に大空に向かって飛び出した。周りの建物より高い位置に昇るとその場で周りを見渡し、ターゲットとする少年を見つけると左腕を突き出し魔力を腕に装備している魔道砲に充填。水晶の魔法を彼に向って撃ち出す。狙い通り彼の周囲に魔法が当たると瞬間、水晶が彼の周囲に現れ彼を閉じ込めた。

そこに突撃をするリカル、そのリカルに向かって正面からプラズマ弾が連続で飛んでくる。それをよけつつ勢いを付けながら更に突撃をする。弾の数は多いが狙いがきちんとしていないためよける事は簡単だった。

突然止まる銃撃、その機を逃さず最高速度で駆け込むリカル。しかしそれはロツクの誘いだった。

APRで前方の空間に弾をばらまきながら、ロツクは始動呪文の詠唱を進める。右手に持つロツドの先端に魔力と理力マナフォースが折り重なっていき、その力が目で見えるようになっていく。そして最後の呪文を唱え終わると銃撃を止め、ロツドを前に突き出し最後の言葉・パワーワードと起動呪文ドレイブスベルを言い放つ。

「切り裂け猫の風爪、ウインドリッパー」

ロツドの先の力がたくさん風の波になり、前方に一気に飛び出す。突然変わった攻撃方法に備えていなかったりカルはまともにもその中に突っ込む。服の魔法防御力の高さのおかげで大きなダメージにはならなかったがジャケットは真空の刃によって裾や袖口など色々な所に切り傷が付き、更に気流を乱された事によって飛行態勢が取れなくなり、そのまま近くの家の屋根の上に墜落した。チャンスとばかりにロツクはAPRを構えると弾丸タイプを変更し、照準を

リカルに定めてトリガーを引いた。

一方リカルは屋根にぶつかる寸前に何とかスティックを水平に持ち直す事に成功し激突を免れたが、そこにロツクの放ったプラズマ弾が飛んでくる。真横から高速で飛んでくる弾をリカルは紙一重でかわすと、もう一度飛び出そうと態勢を立て直す。しかし避けられあさつての方向に飛んで行った弾は、急に軌道を変えて再度リカルに迫ってくる。

「ホーミング弾?!素人のくせしてどんだけ手数を持つてんのよアイツ」

後ろから弾が追いかけてくる事に気付いたリカルは、急いで屋根に降りるとスティックを手に持ち、そのまま屋根つたいにロツクがいる方向へ走りだす。近づいてくるプラズマ弾を空弾銃で撃ち落とすが振り向きざまの攻撃は狙いが定まらず上手くいかない。そのまま走っていると彼女の眼の前の屋根が途切れた。途切れて開けた空間、その視界にロツクの姿を見たりカルは屋根の端から大きくジャンプ、スティックを起動させ立ち乗りの体勢でロツクめがけて突っ込む。APRを構えるロツク、一直線に向かってくるリカル、後ろから迫るプラズマ弾、そしてスティックの上から姿を消すリカル。

スティックだけを飛ばしてリカルは後ろに跳び退く。そして後ろのプラズマ弾を飛び越えると追尾される前に空弾銃で全弾撃ち落とす。一瞬の出来事にあっけにとられたロツクは、それでも自分に向かってくるスティックを横に大きく跳んでかわす。パガンと軽い音と共に地面にぶつかったスティックは大きくひしゃげて地面を転がる。

その攻め方を見てロツクは、彼女は自分を殺すつもりでかかってくるのではないかと考え思わずシツポの毛を逆立てたが、時間は彼に落ち着くひまを与えなかった。

空中から着地したりカルはロツクが正気を取り戻すまでの間に彼の懐に潜り込み、爪を出した右腕を振りかぶり彼めがけて振り下ろす。とっさにロツクはAPRのアームガードの部分でその攻撃を受

け止める。受け止められた彼女はそのままの姿勢で右足から鋭いけりを繰り出す。ロックも体をひねるとけりを放ち、この攻撃も受け止める。受け止められた瞬間リカルは右腕をロックから離すと、腰に手をかけ空弾銃を取り出す。ロックも直感と言うべき速度でAPRを構えると互いにトリガーを引いた。

「グウウ」

「ニヤウツ」

至近距離で炸裂し合う互いの弾丸が生み出した衝撃は二人の体を吹き飛ばした。二人とも地面に倒れたがすぐにほぼ同時に起き上がると、互いを見据えて低い姿勢の構えを取った。

リカルはすぐに飛びかかれるようゆっくりと間合いを詰め、シッポを大きく振りながらタイミングを計っている。対してロックは時間まで逃げ切る方法を考えているが、本気の彼女にここまで近寄り、れてはそれも無理だと諦めている。そもそも今の攻め方を見る限り、彼女は自分の手足を折ったり内臓を潰しても動きを止めようとしているらしく、弱気を見せれば一瞬で決着がついてしまう。ロックはしびれで痛くなっている足に意識を回し、その後シッポで腰の左後ろ辺りに下がっている、できれば使いたくない切り札を確認する。その様子を見ているリカルは、彼の眼には恐怖はなく、また勇気といった物も感じない、全くの別の感情、それは子供が新しい遊びを見つけて嬉々としている、この状況を楽しんでいる彼を見て、言い知れぬ不快感を感じていた。

ここで守勢に回っていたロックが先に仕掛ける。鋭い足さばきでリカルに近づくと彼女の顎めがけて掌ていを放つ。彼女は腕でその攻撃を外に受け流すが、ロックはかわされた手で彼女の肩を掴むとそのまま強引に自分の方に引き込む。予想外のロックの動きにそれでも倒されない様にリカルは耐えたが、それはそのまま彼に背後を取らせる形となる。後ろに回ったロックは左手に持つロッドを持ち直すと、彼女の背中を思いきり殴打する。この攻撃はリカルがとつさに体の位置を変えたため完全に決まらなかったが、それでも少な

からず彼女にダメージを与える事が出来た。

しかし彼女も黙っていなかった。ロツクが攻撃態勢から元に戻るまでの間に体を反転させると、彼の胸元のプレートめがけて腕を伸ばす。ロツクはこれにたいし彼女の腕を掴んで奪取を阻止するが彼女は反対の手でさらにプレートを狙う。当然これも彼が受け止め、がっぷりと組み合う形となる。

似たような体格の少年少女が組み合えば、当然力の面で少年が有利になるが、悪い体勢で組み合っているロツクには彼女を押し返す事が出来なかった。押さえつける力を利用して横払いのキックを放つが彼女の足に簡単に止められる。そしてロツクがリカルを見上げると、リカルはロツクに頭突きをかました。

インカム・メット越してもさすがにきいたため、ロツクは思わず手を離して数歩後ずさる。そこを逃さず飛びかかるリカル。ロツクは目くらましにAPRを地面に向けて撃つが彼女はお構いなしに迫ってくる。とつさにTシャツごとプレートを掴むロツク、彼の肩を掴んでそのまま押し倒すリカル。

仰向けに倒されたロツクはすぐ起き上がろうと体をひねるがリカルがその動きに体をあわせてくるため上手くいかない。空いている手で彼女を殴るが、反対に拳を受け止められそのままひねられる。痛みで思わず呻き声を上げるが、プレートを守る手は一層強く握られる。それを見たりカルはプレートのチェーンを千切り、腕を持ち上げようとするがロツクは頑なに抵抗をする。リカルはプレートの下側に爪を立てるとそのままロツクのTシャツを縦に引き裂き、強引に彼の腕を引っ張る。Tシャツは破れ前がはだけ、そしてプレートを握るロツクの腕はリカルの手で掴まれている。

「いい加減負けを認めな。でなきゃ次はアンタの腕を折るよ」

「やれるならやってみる。もうカウントダウンが始まってんだ、譲れねえ」

ロツクの言葉に太陽の方を見ると、太陽の最後の残滓が今まさに地平線に沈もうとしている光景が目に入る。再びロツクに視線を移

すとさつきもしていた楽しいという表情でこちらを見ている彼と視線が合った。

その顔を見た瞬間、リカルは牙をむき出しにするとロツクの腕を掴んでいた手に本気で力を込める。激痛に思わず悲鳴を上げるが、ロツクも負けじと腕に力を入れてリカルの攻撃に耐える。

「もうやめて。魔法で癒してもすぐには使い物にならない。腕が碎けるなんてアンタも本位じゃないでしょう」

「腕が碎けたって、終わるまでは諦めねえ。何としても……」

しかしロツクの言葉は突然の爆音に遮られて最後まで発音されなかった。音の方向を同時に見る二人の所にレインが走りこんできて勝負の一時停止を告げる。

「一体何があったんですか。今の音は何です」

「今通信があったが、フェアーが来たらしい。どうやらバトリングパペットに乗ってやってきたらしいぞ」

「RWで喧嘩？あのオバサン相当根に持つな」

「とにかく二人とも早く行ってやってくれ。それと」

含みのあるセリフとにやけた表情でレインは先を続ける。

「そろそろ離れな。俺みたいなオッサンはいいとして、他の連中には刺激が強いぜ」

そう言われて二人は自分達の体勢に気がつき、お互い顔を赤くしながら慌てて離れた。

5th ACTION 決着！いただきます

「おら、見世物じゃないよ。ガキどもはさつさと散りな」

持ってきたRW・Pの前で腕組みをしながら、フェアーは見物にきた子供や自警団ににらみを利かせる。好奇心旺盛な子供に見に来るなど言う方が無理だと思いながら、大人であるイギーは苦い表情でパペットを見上げていた。

この村は彼女とは直接対決した事はないが、彼女がどこかに乗り込む時は大抵生身の体かCAコンバットアーマーを使うぐらいだと噂で聞いている。その彼女が少女一人追いかけるのに大型の搭乗式機動武器を持ち出したのだから、よほどの悔しさが見て取れる様である。

「おい、ロックとあの小娘はまだ来ないのかい」

「今呼んできてますから、もう少しお待ちいただけますか」

村の入り口から中に入ろうとするフェアーをイギーは、鞘に入った刀を目の前に突き出して遮る。火の様に怒っているフェアーをやんわりとやり過ぎしながらもイギーは、我慢できなくなった彼女がパペットで村に入り込んでくるのではないかと気が気ではなかった。その時村の奥から、ロックとリカルが一緒にやってくるのが見えた。先ほどの勝負中断からそのまま出向いてきたので、二人とも泥と埃にまみれていたがそんな事は一言も口に出さずにただ走ってきた。その姿をみてイギーは小さく安堵の息を漏らし、前を塞いでいた刀を引いてフェアーを招き入れた。

「うーわ、本当に持ってきているよ。フェアー姐さん、一体どういっつもりだよ」

「言っただろ、今度会うときは容赦しないって」

「執念深いな、そんな女じゃ嫌われるわよ」

「何とでも言いな。こっちはお前をつれ出せりゃそれでいいんだからねえ」

当事者同士の話ということもあり、ロックは少し下がった所から

二人のやり取りを見ようとした。しかし彼女達がまともに話し合いをする事が出来るのか、他人事ながら少し不安になっている。

「とりあえず、話付けたいから来てもらおうか」

「お断りだね、話ならここでも出来るんだ。わざわざオバサンの誘いを受けるほど甘くないわよ」

「おや、強気だねえ。あんた、自分が断れる立場だと思っているのかい」

そう言うとフェアは深い含みのある笑顔で笑うと、自分の後ろにそびえているパペットを親指で指さした。

「まさかそれで村を狙うとか言いだしたりしないだろうね」

「は、村を敵に回すような事するわけないだろう」

フェアはそのまま指差していた腕をゆっくり上げると、指を弾いて合図を送る。それに反応してリカルは思わず身構えるが、パペットはその場で向きを変えると、村のはずれに止めてあるリカルの船に狙いを定めて肩に装備したキャノン砲を構えた。

「あんたが断ればあんたの船がボン、木端微塵さね。さあ、ついできな」

「引き取って行く前に少し待ってくれませんか」

渋い顔をしてパペットを見るリカルとその姿を見て無言で笑うフェア。その二人の間に割って入る様に、ロックが遠慮がちに言葉をかけた。

「なんだい今頃、これは私と小娘の話さね。お前といえども口出しはさせないよ」

「連れていくのは構わないけど、この娘は元々この村に用があったそうだ。今客人として彼女と大事な話の真っ最中、それが終わるまで待つてもらえないでしょうか」

「話だあ。一体何の話をしているってんだい」

「それは……ちよつと言えないけれど」

まさか身柄を預かるといった相手と戦っていたともいえず、ロックは言葉を濁しながらリカルを引き留めようとした。自分が押され

ていたとはいえ、勝負だけは白黒はつきりつけたからである。フェアーがはつきりしない態度のロツクをよく見ると、前に出てこなかったから気がつかなかったがリカルと同じで体中汚れただけであり、さらに彼の服は胸の方が縦に裂けていて上半身がはだけている事に気がついた。

「あんたら何だかボロボロだけど、何かしていたのかい」

「えーと……何でもありません、本当に何にもありません」

そう言つてロツクはそっぽを向くが、組み合っていた時にリカルに上に乗られた事を思い出して、自然と顔が赤くなる。それを見たフェアーは思わず変な方向に思考を飛躍させ、驚愕の声を上げた。

「あ、あんたらもしかや二人していかがわしい事してたんじゃないだろうね」

「はあっ」

突然のフェアーの言葉に今度は二人の方が驚きの声を上げる。

「出会ったばかりの奴に変な事なんかしますかよ。まあ楽しかったけど」

「楽しかったって何がだ！おら言え、あの小娘と何してやがった！」

ロツクの言葉に反応して、彼もたじろくほどの勢いで詰め寄るフェアー。それを見ていたリカルはある事に気づいた。そしてフェアーにひと泡吹かせてやろうと、ある行動に出た。

「へえ、ひよつとしてオバサンそいつに気があるの」

「な、いきなり何言い出すんだいこの小娘は」

少女にいきなり凶星を突かれて、火がついたと思われるほど顔を真っ赤にさせるフェアー。それを見たりカルは心の中でガツツポーズをとりながらフェアーに追い打ちをかける。

「何よ顔赤くして、アンタの方がよっぽど小娘みたいじゃない。意外と可愛いわよ」

「ふ、ふざけるな。小娘がナマ言つてんじゃないよ」

「でも残念ね。いくら相手を想つても、その人に相手にされなく

「ちやね」

真つ赤になりながら怒鳴り散らしていたフェアーに、意味深な言葉をリカルが言つと、彼女はロツクに近づく。フェアーも彼女の行動に気付くとそちらに目を移す。

「どういつつもりだよ」

「ごめん、こつちにあわせて」

小声で話しかけるロツクに同じく小声で話すリカル。すると彼女はそのままロツクの腰に手を回すと、そのまま自分の体を彼に預ける様に傾ける。これにはロツクもフェアーも驚いたが、リカルは構わず演技を続けた。

「この人、実は初対面じゃないのよね。前にステップの町で出会つてその時意気投合してね、直接会う事はあまりなかったけど連絡は結構取り合つててね」

そこまで話してから顔の向きを変えてロツクの顔を見ると、リカルは少しうつむき耳を倒して、恥ずかしそうに話を続ける。

「結婚の約束もして、今度会うときは正式に婚約をしたいから家族に会ってもらいたいっていわれて。それで今日この村に来たのよ」

『ナーニー!!』

リカルの言葉に、二人は驚きを声に出して叫んでいた。秘かに想つていた男に別の相手がいた事にショックを隠せないフェアー、しかし彼女以上に驚いたのは、いきなり婚約者に仕立てられてしまったロツクの方だった。

「おいこらロツク、てめえ一体どういうことだ。本当にこいつとそんな約束してたのか」

「え、いや、これは、その、あの……」

大きく取り乱していたフェアーはロツクに掴み掛かりそうな勢いで事の真偽を問いただそうとしていたが、同じくパニック状態になっていたロツクは上手く否定できずにしどろもどろしている。困つたロツクがリカルの方を見ると、彼女の両手が彼の頬に掛かるのが、タイミングを合わせたかのようにほぼ同時に行われたかと思う

と、次の瞬間、リカルは自分の顔を彼の顔に思い切り押し付けた。

突然の出来事に、ロツクは目を大きく見開く。その目に映ったのは、瞳を閉じて頬を紅潮させながら、自分の唇に恥じらいながら唇を重ねている一人の少女の姿が、まるで静止画のようにロツクの視界を占めていた。そしてその光景は周りで今までのやり取りを見ていた者達も沈黙させた。ある者はあつけにとられ、またある者は好奇の目でそれを見、絶望に顔をゆがませる者もいれば芸が過ぎると苦笑いをしている者もいる。

「兄様、知らないお姉ちゃんとチューしてる」

小さな女の子のその声が合図になったのか、口づけをしていたリカルはロツクから顔を離すと、半歩ほど身を引いた。今だにシヨックで焦点の定まらず、呻き声を出しているロツクをしり目にリカルはフェアーの方を見る。顔にはまだ赤みが差していたが、嫌いな相手にしてやったというような表情で彼女を見ていた。

「分かった。アタシ達の間には、あんたみたいなオバサンが入る余地なんてないって事が」

「このメスガキやあ！」

その言葉に理性が吹きとんだフェアーは、一声吠えるとリカルに向かつて一直線に駆け込み、その体格と速度を活かして右の拳を放つ。しかしリカルは一步前にでて軽く構えると、フェアーの渾身の一撃を左手で難なく受け止めた。受け止められた事に驚くフェアー、次の瞬間彼女は左の肩に激痛を感じ、その場にうずくまった。彼女の攻撃を受け止めたりリカルはその力を利用して体をひねると、彼女の肩にカウンターで蹴りを見舞ったからだ。肩を押さえるフェアーにリカルは、上から少し冷やかな態度を取る。

「不意を突かれなきゃ、現役のハンターが素人に負ける訳ないでしょ。アンタじゃアタシに勝てない」

リカルに声をかけられたフェアーは顔をあげて鋭く少女を睨むと、地面を踏みこんで再び少女に飛びかかる。リカルもその場を軽く飛び退くと構えなおして彼女を迎え撃つ。

少女と女性が拳で戦っているうちに、レインとロツクの兄弟達はロツクの所に集まって来た。

「ルーフォ、おいルーフォ。……駄目だ、完全に意識が飛んでやがる」

「誰か気付け薬を持ってきて。兄さんしつかり」

「わー、シツポも体毛も全部逆立ってやがる。こんな兄貴見たことねーよ」

ロツクはパニックとショックのせいで体中の体毛が一斉に逆立ち一つの巨大な毛玉になっていた。相変わらず視線は一つに定まらず、口からは言葉にならない声が漏れている。

別の子供が薬を持ってきてシリユウに手渡すと、彼はすぐに中身をロツクの口に含ませる。薬の味に少しむせてからロツクはようやく正気に戻った。

「ルーフォ、気がついたか」

「兄様、だいじょうぶ？」

「うん、ありがとう。それよりあの後どうなった……」

「オラア！」

「ガウウウ」

ロツクが状況を確認しようとした矢先に辺りに響いた雄叫びによって、彼は今の状況を確認する事が出来た。自分の助けた少女とその少女を追ってきた女性が、村の入り口前でネコの喧嘩キョットフアイトながらの殴り合いをしている光景が展開されていた。

彼女たちの放った拳はきれいに相手の顔面に入り、クロスカウナーの状態で数瞬立ち尽くしていたが、すぐに体勢を立て直すと再び殴りあいや取っ組み合いが開始された。二人ともあちこちに殴られたり引つかかれた跡がついて髪もぼさぼさに乱れており、その姿はとも女らしさとはかけ離れていた。

「……あれ、どうするつもりですか」

「ああいうのはとことんやらせてやった方が後腐れがなくていいんじゃないの」

「友達同士の喧嘩ならともかく、負けた方は相手を恨むぞ。大体あんな所でやられたら子供達の目の毒に……」

戦っている二人の様子を離れた所から見ていたロツク達だが、ロツクはその動きが変化した事に気がついた。左右に拳を振るって押し込むフェアアの攻撃を腕で受け流しながら、足を狙ってリカルルの蹴りが飛ぶ。フェアアがそれを飛んでよけると同時にリカルも後ろに下がり二人は間合いを取り直す。態勢を立て直すと同時にフェアアは、腰に下げている鞘から刀を抜き、リカルに突進する。リカルは腰から空弾銃を取り出すと後ろに飛びながら弾を撃つ。しかしフェアアが刀を振るうと、空気の弾は本当に空気を斬ったかのように何の抵抗もなく消えていく。

『魔法剣!』

同時に呟くロツクとリカル。リカルは腰に下げていた別のホルダーからやや小振りのコンバットナイフを取り出すと、刀身に自分の魔力を込めフェアアの刀を受け止める。リカルの魔力と魔法剣の魔力が火花を散らして淡く輝く。刃の直撃は避けられたものの、体格差と武器の違いのためリカルは徐々に押されていき、ついにはナイフを手から弾き飛ばされた。

「終わりだ、くたばれ」

ナイフと一緒に地面に倒されたリカルに、返す刃で向かうフェアア。立ち上がることもよける事も出来ないリカル。一瞬死を覚悟して、思わず目をつぶる。しかし、瞬間に響いた何かがぶつかりあう甲高い音が聞こえたかと思うと後は沈黙が続く。

何が起きたのか確認のため目を開いたリカルが見たのは、いつやっつて来たのかロツクが自分の目の前にたっており、自分の命を取ろうとした凶刃を剣で受け止めていた姿だった。ロツクの持つ剣は、二本の剣を前後で一つに合わせた形をしており、その刀身は淡い青色の粒子エネルギーで形作られている。そしてその剣は、魔力を帯びてないものなら何でも斬る魔法剣を確実に受け止めていた。

「……粒子波動刀」

リカルはそれだけ言うと、よろめきながら立ち上がる。粒子波動エンジンの副産物であるその武器は、現世で起きるあらゆる現象は全て粒子レベルに置き換えられると言う理論をもとに作られた、物質、波、魔力、ありとあらゆるものに干渉する事で全てを斬る事が出来る剣である。

「ロック、いきなり飛び込んでくるたあどういっつもりだい」

「どういっつもり、だって」

刀のつば競り合いをしながら今更出てくるなという形相で問いただすフェアー。声を落としてそれを聞き返したロックは、顔を上げると同時に剣の出力を上げる。その目には全てを射抜き、切り裂くほどの鋭さが光っており、それに合わせるかのように剣がフェアーの刀の刃を削っていく。

「どんな理由でも、この村じゃ人殺しはご法度だ。それに、これ以上オレの客に手は出させねえ！」

声を高く叫ぶと同時に踏み込むと、フェアーの刀が砕けた。武器を壊され呆然とするフェアーにすかさずロックは上段の回し蹴りを当てる。まともに体に入ったフェアーはたまらず横に飛ばされる。フェアーを倒したロックはそのまま剣を構えて門の外のパペットの所まで走りこむ。

「何でもいい、ロックを止める」

フェアーがパペットのパイロットに指示を出すと、パペットからロックに向かって攻撃が来る。しかしロックは攻撃のことごとくを避け、あるいは剣で弾き飛ばしながら一気に自分の間合いに入り込むと、パペットの機体の上を駆けあがり剣を振りかざす。

「シャアアアー！」

鋭く吠えたロックは剣を頭上で回転させると、そのままパペットに剣を振り下ろす。剣は複合金属で作られたパペットの外装を斬るとそのまま内部ごと切り裂き、切られた所を境に機体が真っ二つになり地面に崩れ落ち、乗っていたパイロットも外に叩き落とされた。地面に着地したロックは軽く息を吐くと、片足を軸にその場で振り

向きフェアーの方を見る。

「姐さん、馬鹿してくれたよな。今日の件はこれでチャラだ。このままお引き取り願おうか」

「分かったよ。……おい、お前名前は」

「リーンカーラ。知り合いはリンと呼ぶ」

「リンか。今日の所は私も急ぎすぎたし引かせてもらおうよ。でもね、でもねえ」

不意に言葉が詰まったフェアーをリカルが改めて見ると、その目には涙が溜まっていて顔が感情で紅く色付き体が小さく震えていた。

「アンタがこの星から出るまでに必ずケリつけてやるから、覚悟しておけ」

そう言うフェアーはロックの側を駆け抜け、何とか無事だったパイロットのパイロットと共に走り去って行った。

「……今の何よ」

「あの人が、本当はすごい泣き虫なんだ。いつもあんな風になるから気にすんな」

リカルの問いかけにロックはそう答える。元々気にするつもりが無いリカルは、話をきいて適当に受け答えをした。

「いやあ、あいつのやり込まれた姿、久々に見れて気分がスツとしたぜ。所でお二人さん、これからどうするんだ？」

そこにレインが話に割って入ってくる。二人はレインの話の意味がよく分からなかった。レインが周りを見るようジェスチャーをするのでそれにならうと、子供達の視線がみんなこちらに向かっている事に気付く。何事かと思っていると、二人の側にシリユウ達が近づいてきた。

「あの、兄さん本当にそちらの方とご結婚なさるのですか」

「てかロック兄、将来を約束した相手がいるなんておれ達にも話してないよな」

そう言われてアツとロックは思い出した。自分で言いだした事ではない事と、いきなり色々な事が起きたので忘れていたのだ。すぐ

にリカルの方を見ると、頬を指でポリポリとかいて曖昧な笑みを浮かべている。彼女はフェアーに勝ちたい一心である事を言い放つたため、その後の事はまるで考えていなかった。

「兄様とけっこんしたらお姉ちゃん、あたしの姉様になるの？」

「ロツク兄ちゃん、冒険者になるの止めるの」

「この人冒険者だろ。この人について行くのか」

「そんな事より、いつ結婚するの。日取りとか色々考えてあるのやいのやいのと質問してくる少年少女、子供達に囲まれて、二人は顔を見合わせるとお互いに何と言えば良いのか分からず、ただ生返事を返す事しかできなかった。そんな二人の肩にレインは手を置くと、そのまま二人の顔の間に自分の顔を近づけると小声で二人に囁いた。

「こりゃもう駄目だな。今更ウソでしたじゃすまないぞ」

「オレ……これからどうすりゃいいんニャよ」

6th ACTION 少年の決意 少女の本気

この日はとにかく大変だった。現任の村長が婚約者を連れてきたと言う事で村人が一気に盛り上がり、村では急遽リカルの歓迎会が開かれた。広場に集まった村人は、持ち寄った食べ物や飲み物に手をつけ、歌や踊りを披露して二人を祝福していった。当の二人は内心穏やかではいらなかったが、それでも外見は繕って村人たちの祝福を受け取っていた。

やがて夜も更け村人のほとんどが寝た頃、ようやく解放されたロツクは、月明かりを頼りにある場所に歩いて行った。そこには大きな桜の木が一本見事な花を咲かせて立っていて、水の海が一望できる彼の一番お気に入りの場所である。

桜の木の根元に座ると、ロツクは肩にかけていた小型のシンセサイザーを構えて、先程から村人たちに聞かせていた、祭りの曲を弾き出した。

弾いている曲に合わせて小声で歌い出した時、後ろから小さく誰かの足音が近づいてくる。少し倒していた耳を立ててその音を聞いたロツクが演奏を止めて後ろを振り返ると、自分をこの騒ぎの中心に巻き込んだ少女が手を振りながら近づいてきた。

「よくここがわかったね」

「ここにならあなたがいるかもって聞いたから」

ロツクの質問に彼女は答えると、ロツクの隣に腰を下ろす。戦いでポロポロになった身体をきれいにしてきた時、ついでに着替えもしてきたという彼女は、桜色をした軽い生地ワンピースに小さな髪飾りという格好で、その雰囲気の変わりようが先ほどの彼女とはまた違った魅力を引き出していた。海から時折吹いてくる風に揺られて舞い落ちる桜の花びらがリカルの髪の毛の金色を一層際立たせ、彼女の服の色と相まって、隣の彼女はまるで桜の花の妖精の様に見える。

そんなリカルを見ていたロックは、胸の鼓動が急に早くなつていくのを自覚して慌てて彼女から顔を背け、そのまま二人とも無言でしばらく海の方を見ていた。ロックは無意識の内に右手を唇に持つていくと彼女とキスをした事を思い出し、高まっている鼓動を悟られないよう気をつけながらゆっくりと口を開いた。

「さっきのアレの事だけど、あの人にひと泡吹かせるためだけにあんな事したの」

「……そう言う考えも確かにあったけど、アタシはそんなに軽く無いよ。さっきのだって、したのは初めてだもの」

リカルはその言葉に思わずロックは彼女の方を見ると、その顔は恥ずかしさのためか赤くなつており、耳を寝かしてせわしなくシッポを動かし落ち着きが無い。ロックは少し身体をリカルに向けると、気持ちを落ち着かせようとして自分のシッポを前に持つてきて手で揉みながら更に言葉を続ける。

「ねえ、本当に僕でよかったの」

「アタシのそのしゃべり方、アタシ好きになれないよ。もっと自分出せばいいのに」

「本音を話してくれない人に、自分を出す気はないな」

横目で見ながら不満声で話しかけてくるリカルにぴしゃりと一言言うと、二人の間にはまた沈黙が訪れる。いつの間に宴会も終わったよう、時々聞こえてきていた人の声や音は完全に消えていた。

「正直、一人はもう限界なのよ」

膝を曲げて足を両手で抱えると、リカルは注意して聞かないと聞こえない位に小さく掠れた声で話し始める。そんなリカルをロックはただ黙って見ている。

「Lost、強い価値観持たなきゃ周りに流されるこんな世界。アタシは自分の考えを証明するためにハンターになつたけど、気持ちをいつも強く持ち続けることも、女の子一人でハンターするのもきついのよ、実際。誰かとチーム組めばいいんだろうけど、アタシは思った事そのまましちゃうから色々もめ事が続いて誰もついては

こないし。昔、仲間になれそうないい友達がいたけど、そいつは家の都合で一緒に来る事が出来なくなつて、それ以来会っていない」
ここで一度言葉を切ると、リカルは顔を上げてロツクの方を向き、彼の目を見ながらさらに話を続けた。

「一緒に来てアタシの事を支えてくれる人、それでなければアタシの事を待つてくれる人、アタシの帰る場所を作つてくれる人が欲しいの」

「それで行きずりの恋にはまつたのか？相手もよく見ないでそんな事しても自分が不幸になるだけだよ」

「それでもアンタは信用できる」

そう強く断言するリカル、その目には先程までの寂しさはなかった。どうしてとロツクが訪ねると、彼女は真つ直ぐ彼を見て答え出す。

「武器を持つているガラの悪い連中から見ず知らずの人を助けて、その助けた人を放つておかずにいた。いろんな人に好かれて、何より身に纏つてゐる雰囲気。一緒にいて安らぎを感じる事が出来る、そう言う所でアンタを信じる事が出来る。……あなたを好きになれる」

自分の考えを言いきり、リカルはまた口を閉ざす。リカルの告白を聞いていたロツクは指で自分の頬を搔きながら、照れ隠しにシツポで桜の木の幹を軽く叩いている。

「それがアタシがロツクを好きになつた理由だけど、迷惑だったかしらね。アタシみたいな女に好かれて」

「そりゃまあ、いきなりあんな事されてこんな事になつて、始めは何考えてんだこの女とは思つたけど」

ロツクが遠慮のない口調でリカルに話すと、彼女は少し悲しそうな表情をして目を下の方に伏せる。それを見たロツクは慌てて話を続ける。

「でもね、村の仲間達みんな祝福してくれたし、久しぶりにみんな笑顔になつた。みんなが元気になるんだつたらこれはこれで良い

ことだし、それに本当に好きじゃなかったら、実は無関係だって事を話す機会はいくらでもあった」

ロツクの話の最後の方を聞いたリカルは、驚きと嬉しさの混ざった表情でロツクの顔を見る。ロツクはリカルのエメラルドグリーン目を見て再度口を開く。

「その目。強さと優しさ、決意と勇気の光を持っている、その目がオレは好き」

一瞬真剣な顔で自分の目を覗き込むロツクに、リカルは自分の心臓の鼓動が一拍高くなるのを感じた。言葉に詰まるリカルを見ていたロツクも、ふいと視線を外すとまた海の方を見つめ出す。リカルはまだ頭の中の整理がついていなかったが、海の方を見ているロツクの目が、自分を見ていた時と違って少し物哀しそうにしている事に気がついた。不意にリカルは村にきて感じた事を思い出し、ロツクの態度に嫌な予感を覚え、それでも思い切つて聞いてみた。

「この村、どうして子供ばかりで大人を全然見かけないの」

そう聞いてから彼女は彼の顔を覗き込むと、自分の予感が当たっていた事を察した。ロツクの目は先程以上に哀しさを持って遠くの方を見つめている。

「ごめんなさい、変なこと聞いて。話したくなかったら話さなくていいから」

その姿を見てリカルはすぐに自分の発言を取り繕うとしたが、ロツクは軽く首を振ると、ゆっくりと静かにリカルの問いに答え出した。

「……五年前、村の子供たち全員で近くの森に行っていた時に、村に異変があった。ナノマシンって知ってる？Lost以前の技術極小単位の機械の事。どこから村の中に持ち込まれて、それが大人たちの体の中に入ってね、村に戻ってきた時、大人たちはほとんどが死んでいた。オレ達の両親も手遅れの状態だった」

ロツクの話をただ頷きながらリカルは静かに聞く。どこか現実味の無い話ではあったが、ナノマシンの事は彼女も取り扱う事もある

ので大体は知っているし、暴走したそれが人体に悪影響を与える兵器になることも知っていた。

「村長だった親父は、自分の子供の中で一番年上のオレに後を託して息を引き取った。オレは親父の後を継いで、見たことも聞いたことも無い事、ましてや親父の仕事なんて自分に興味の無い事、それを全部する事になった」

そこまで話して、ロツクは手に持っていたシンセサイザーを地面に置くとキセルを取り出し火をつけ口にくわえる。ハーブの煙を強く吸い込むと、キセルを口から離して勢いよく煙を口から吐き出し、指で掴んでいるキセルにじつと視線を落とす。

「それから今まで、ただがむしゃらに突っ走ってきた。右も左も分からない状態のオレがここまで出来たのは、兄弟や村の仲間、それに親父の知り合い、色々な人達に支えてもらったから。一人じゃ何もできなかったな、もともと人をまとめる事が嫌いだったから」

「託されたものは大きく、残されたものは重く、ね」

「確かに親からもらった遺産が責任、なんてのは冗談で済ませたいけどな」

そう言つて八八と彼は笑う。自嘲気味に聞こえる声とは裏腹に無理をしていない素直な笑い。それがかえつて彼の心を縛っている様に見え、リカルはなぜか自分の心がチクリと痛んだのを感じた。

「でもみんなを捨てる事なんて出来る訳ない、だからオレは自分の気持ちを押し殺して村を守ってきた。自分がいなくなつても大丈夫になるまではそのつもり」

そこまで話すとロツクはまたキセルに口を付けて話を区切る。彼の気持ち分かる訳では無いが、追いかけていた物が急に掴めなくなった時の喪失感はりカルにも分かっている。口から煙をゆっくりと出している彼を見ながら考える。自分には彼を連れ出す事が出来る。お節介かもしれないが冒険者になる事は彼自身の願いであり、そのための修行もしていたと言っただけあつて筋もいい。足りない部分は補つてあげればいいだけのことだろう。

しかし彼には村を守ると言う使命がある。それがあつた限り彼は村を出る事は出来ない。それが彼を苦しめている事はリカルにも分かっているからこそ、彼にこの事を話すかどうか悩んでいる。リカルは決して同情から思っている訳ではない。自分が好きになつた人の力になれたらと思つての考えだつた。

「……そのつもりだつたんだけどな、オレもお前と同じでもう限界」

色々考え事をしていたりカルは一瞬、ロツクの言葉を上手く聞き取ることが出来なかつたが、彼が体をこちらに向けて先程以上に真剣な目で自分を見てきたのでその思考を一時止めて、次の一言を待たつた。一瞬本当に求婚でもされるのではないかと思つたが、彼の言葉はそれより衝撃的だつた。

「リカル頼む、君の冒険にオレも一緒に連れて行つてくれ。みんなには悪いけどオレ、自分の気持ちにこれ以上嘘をついていられない。冒険したいんだ」

それはロツクの決意の表れだつた。そしてそれはリカルを驚かせるに十分な言葉だつた。確かに自分も彼についてくるか聞くことが考へていたが、彼の方から言われるとまでは思つていなかったからだ。

「そんなダメよ。アンタはここに必要な人でしょ、自分の勝手だけでそんな事しようなんて。子供達はまだアンタの事を必要としているのよ。それなのに連れ出したりなんかしたらアタシがみんなから恨まれるわよ」

「もともとオレが、時期がきたら村から出ていく事はみんな知っている。それが少し早くなつただけだ。なあ頼む連れてつてくれ、お前の迷惑にはならないし足手まといにもならないから」

「そう勝手に話を進められるのが迷惑なのよ。アンタの力は認められるけどアタシはアンタを連れ出せない。いくらネコ族が自由に好き勝手な性格しているからつて人を巻き込まないでよ」

「何だと、始めに姐さんとの言い合いに巻き込んだのはそつちじ

やないか。オレの事には巻き込まれたくないなんて言うならプレートは渡せねえ」

形として断るリカルに食い下がるロツク。互いの言葉が熱を帯びてきて口喧嘩に発展しそうになったとき、ロツクのプレートという言葉に二人ともハツとして少し落ち着きを取り戻した。あの後結局勝負が再開されなかったため、プレートははまだロツクの手の中にある。二人はどうすれば自分の欲しい物を手に入れられるかと、相手の腹の内を探りながら次に言うべき言葉を探していた。しかし次の言葉は、二人から離れた所の第三者が放ったものとなった。

「行つてきて下さい、兄さん」

「シリユウ！いつからそこにいた」

二人に声を掛けたのは、ロツクのひとつ下の弟だった。彼は二人の間まで歩いてくると、二人に向かつてもう一度話した。

「行つてきて下さい兄さん。それが兄さんの望みなら」

「シリユウ、お前」

「ちよつと待って、本当にそれでいいの。あなた達にとって大切な人なんですよ、どうしてそんな簡単に送り出せるの」

リカルの質問にロツクも頷く。自分のことだが簡単に認めてもらえると元々考えていなかったからだ。シリユウは二人に微笑みながら話します。

「兄さんが冒険者になる事をはじめて相談してきたのは僕です。

当時の僕は兄さんほど行動力も無ければ、自分の信念や価値観も無い。だから村を出て自分の力だけで生きていこうとした兄さんは、僕の中では憧れで、そんな兄さんを応援しようとして僕が村長になる事にしたんです。でも数年前の事件以来、兄さんはずっとこの村で僕達の面倒を見る事になって」

「ちよつと待て。確かにそうだったけどそれは結果で、オレはその事を不満だと思つてない」

「それはわかっています。でも兄さん、暇があればいつも遠くの方を見ている事、誰も知らないと思つていましたか」

コートに指摘されるとロツクは小さく呻いてそっぽを向く。それを見たリカルとシリユウは、それぞれの表情でロツクを見て微笑んだ。

「アハハ、アンタって変な所で正直になるのね」

「悪い事した訳じゃ無いのですから、もっと堂々とすればいいのに」

「るっさい。そう言う性格なんだからしょうがないだろ」

むくれながら二人に抗議するロツク。その姿を見て二人にまた笑いがこぼれ、ロツクも二人に感化されて自然と笑みがこぼれた。

「リンさん、兄の事をお願いできますか」

「そこまで言うのなら構わないけどね。でも念を押すけど本当にロツクを外に連れて行っていいのね」

「この村の長になって、それでも兄は冒険の事を忘れる事が出来なかった。自分の信念を持ち続けているなら、それを後押しするのが兄弟でしょう」

シリユウの言葉にへえ、と小さく呟くと、リカルはロツクに声をかける。

「いい人たちじゃない」

「全く、オレにはもつたいない位に良い兄弟たちだよ」

「ふふ、兄さんが僕達の事を思ってくれるように、僕達兄弟や村の人達もルーフォ兄さんの事を考えているんですよ」

「本当、仲がいいのねココの人たち。やっぱり連れていくのは気が引けるな」

「おいおい、今更そりやないぜ」

リカルの言葉に抗議するロツクだが、声と言葉がいまいちしまらないため逆に情けなく聞こえて、思わずリカルは笑ってしまった。笑うリカルを見てロツク達兄弟もつられて笑いだして、暗い辺りに三人の笑い声が響きわたった。ひとしきり笑った後、始めに元に戻ったロツクは二人に改めて話し始める。

「そうと決まれば早い方がいいか、明日みんなに話して村を出る。」

村長としてお前を任命する」

「分かりました、予定通りという事で行くのですね」

「ああそうする。……悪いな、本当ならまだお前らに色々教えるために残ってないといけないのに」

「ルーフォ、あなたの強さは世界をめぐるための強さだ。僕達の事は僕達が解決する、あなたはあなたの道を進んで下さい」

そう言うとシリユウは明日は早いからと頭を下げて家に帰っていく。リカルももう休むと言って、ロックが手配をしておいた村の宿に向かっていく。一人残されたロックは、桜の木の幹に体を傾けると、先ほどから手にしていたキセルをまた口にくわえ、五年前のあの日以来の出来事を思い出しながら空に煌めく星を眺めていた。

エピローグ 『寂しくなるのが親心か』

翌日、ロツクは村人達を集めて、昨日リカルとシリユウに話した通り村を出る事を伝えた。ロツクが予想していたより村人からの反対などがなかったため、みんな自分の事を分かってくれている事を知ったロツクは、自分のわがままを分かってくれているみんなに深々と頭を下げた。

その後、新しい村長には弟のシリユウを、守人には弟子のイギーを任命していき、さらにイギーと計画していた自警団を本格的に活動させることも決定。これがロツクがオーシャンガレージで行った村長としての最後の仕事になった。

集会が終わってからロツクとリカルは、村人に手伝ってもらいながら旅立ちの準備を行った。初め二人はそこまでしてもらうのは申し訳ないと断っていたが、みんなが手伝いたいと言っているとしりユウから聞かされて、そこまで言うならという事で手伝ってもらっている。ロツクはもともと旅に出るつもりでいたので荷物は必要最低限の分が自分の部屋の隅に置いてあり、それは最後に積み込むと言う事で基本は船の整備と内部の片づけになった。

墜落した時にメチャクチャになった船内のうち、ブリッジと機関室、それと居住区の二人分の個室を片づける。ここであまり時間をかけたくないで残りの部分は落ち着いてから、どこかでゆっくり調査と片づけをすると言う事になっている。各区画と通路の掃除、旅に必要な物資の搬入、各コンピュータや機器のチェックを行い、昼前に船の準備は出来上がった。

船の準備が終わり、お昼に近いと言う事で子供達はそれぞれ昼食をとり始める。リカルも一段落ついた所あたりを見渡すと、いつの間にか近くで作業をしていたロツクがいない事に気付く。何となく気になったリカルは、昼食に出されたサンドイッチを二人分もらうとロツクを探しに出かけた。

村の外までは行っていないだろうと考えたりカルは、とりあえず昨日いた桜の木の丘に向かってみると、思ったほど簡単に見つける事が出来た。彼女はロツクに小走りで駆け寄ろうとしたが隣に人がいるのを見つけた。彼はその先客と話し込んでいたので、リカルは邪魔にならない様に距離を置いて二人を見ていた。

「あーあ、ロツク兄もついに旅立ちか。これでまたここも寂しくなるニヤア」

ロツクの隣にいたのは、彼の小さいほうの弟のエトだった。彼は自分の手首の毛を舐めながらロツクに声を掛ける。その言葉を聞くとロツクはゴメンなどと小さく謝る。エトは開いた手を振ると気にすんなとその言葉を遮る。

「自分のしたい事をしたい様に出来る奴がこの世界で成功する、父ちゃんがいつも言ってた事をロツク兄はするんだろ。こちに遠慮なんかすんなよ」

「親父か、確かにそうだよな」

エトの言葉でロツクは父親の事を思い出していた。彼の父は強さと優しさを併せ持ち、常に物事を公平に見定めていた。世界の事について詳しく、たくさんの見識と知り合いを持ち、両親が健在な頃は様々な人たちが村を訪れていた。また理解力も高く、自分達兄弟のする事に対してはよほどの事がない限り認めてくれていたし、ロツクが冒険者になると告げた時も、自分で言ったからには最後まで自分を貫き通せと背中を押してくれた。

そうした様々な点で偉大な男、例え他人だとしても目標と出来る人物である事に変わりないだろうし、実の息子であるロツクにとつては目標であり、またおそらく永遠に超える事の出来ない壁となる人。ロツクは一人その事を考えながら、プレートを手で弄んでいた。「でもそのプレートが集める物だって、ロツク兄と同じ考えしてる人もやっぱいるんだな、ロツク兄はそれを地図だと思ってるんだろ」

「彼女は鍵と思ってるようだけどな。どちらにしても組めるなら、

後から戦うような事にはならないからいいや。あいつ強いもん」

「それだけ？あの姉ちゃんに惚れたからだろ、カッコつけんなよ」
そう言つてキシシと意地の悪い笑いをあげるエト、ロツクは凶星を突かれて思わず顔を背ける。しかしロツクが顔を向けた先には、二人の会話を聞いていたリカルが顔を少し赤くさせて立っていた。

話を聞かれていた事に気がついたロツクも顔を赤くしてリカルを見ると、邪魔者は退散とばかりにエトがその場から立ち去っていく。ロツクはエトを呼びとめようとしたが、それより早くリカルがロツクに声を掛けてきた。

「まさかプレートの意味を同じに捕えていたとはね、おまけにそれを持つている。もしかして付いてくる理由、プレート狙いじゃないでしょうね」

「違つ、いや違わないか、確かに同じ考え方をしている奴と一緒に組みりや後から楽になるものな。でもこれだけは言っておくけど、オレ決してそれだけの理由で外に出たいって言ったわけじゃないから」

「それってやっぱりアタシに惚れてるから？」

「ぐ、やっぱり聞かれてたか。ああ確かにそれもあるよ。でも冒険者にとって一つの旅は通過点だろ、オレはプレートがらみの冒険一回で冒険者をやめる事はない」

「ふうん。ま、アタシを裏切らないでいてくれたらその事はいいいけどね」

そう言つとりカルは持つていた昼食をロツクに渡して、自分もそれを口に運んだ。おいしそうにサンドイッチをほおばる彼女を見て、ロツクも手に持つている分を食べ始めると、荷物を取って来るとりカルに言い残してその場を後にした。リカルは最後の一口を口の中に放り込むと、ゆっくり噛んでから飲み込んだ。

「食べ歩きは行儀が悪いでしょうに」

リカルと別れたロツクは真つ直ぐ自分の家に向かうと、自室に置いてある荷物を持ち出した。アウトドア用の大型のリュックと手持

ちサイズのザツクを二つ、それに愛用のボードをケースに入れた物を肩から掛ける。荷物を全て持つてからロツクは改めて自分が今まで使っていた部屋を見渡し目を閉じる。部屋には旅には使わないものがたくさん残されており、その一つ一つにはそれなりの思い出が詰まっている。それらを思い出すように静かにその場に立ち尽くしていたが、ゆっくり目を開くと心持ち強めの歩調で歩きだし部屋を後にした。

荷物を持ったロツクが船に近づくと船の前で待っていた子供達がロツクに集まってくる。面倒を見てきた小さい子供や友人に挨拶をして、外から招いた人達に村の事を頼むと、彼は船に足を進める。船を入り口前では先ほど別れたリカルがロツクを待っていた。ロツクに気付くとリカルは片手をあげて出迎え、それに気づいたロツクも片手をあげて答えた。

「お待たせ、オレの分はこれで全部だ」

「こつちも皆のおかげで調子いいわよ。いつでも飛ばせる」

笑顔で話すリカルを見てからロツクは後ろを振り返り、集まってくれたみんなに再び頭を下げた。

「みんな、今までありがとうな。別れは言わないから、元気でまた会おうね」

「挨拶はそれで全部？」

リカルの問いにロツクは小さく頷くと、ロツクは改めてリカルに体を向けた。

「改めてよろしくな。オレはロツク、ロツク・ラジファスト。冒険者だ」

「リーンカーラ、みんなはリンって呼ぶ。けど相棒はリカルって呼ぶ。これからよろしくね相棒」

ロツクが改めて自己紹介を行ってから手を差し出すと、リカルもそれにならって自己紹介をして、差し出されたロツクの手のひらを軽くはたく。そのままリカルは今ほたいてきた手を前に出したので、今度はロツクが彼女の手のひらを軽くはたき、最後に二人は顔に笑

みを浮かべながら両手でハイタッチを行う。二人の肉球が触れ合っ
て、パニヨンと心地よい質感の音が響いた。

二人が船の中に入ると扉が閉まり、少しすると船から音が聞こえ
てくる。初めは小さい音、それが徐々に大きく規則正しい音になり、
一番高い音になったとき、船が地面から離れて空に浮かんだ。その
ままかなりの高度を取ると船はその場で向きを変えて海の方を向く
と、大海原に向かって飛び出していった。

子供達がいつまでも手を振っている後ろで、レインと彼の知り合
いでもある村に住んでいる大人達は小さくなっていく船を見続けて
いた。教師や医者など、ロック達に出来ない分野の専門家を村に招
きたいとロックが言った時、レインは信用のおける人物を探し出し
てはロックと一緒に交渉をした。昔の事だがレインは昨日の事の様
にその時の事を覚えており、それは招かれた人々も、そしてロック
にとっても同じ思い出である。

「行っちゃたね、あの子」

村の診療所に勤めている女医は、レインの隣に立つとそこにいる
人達に聞こえる様に話す。

「子供はいつか旅立つものさ、大人が何を言ってもそいつの目が
生きている限りはな」

もっともらしい事を言いながら、レインは葉巻を取り出すと、ラ
イターで火を付けて葉巻を吸う。口では強気な事を言っているがそ
の顔はどこが寂しげで、それを見た他の人たちはレインを残すと自
分達の仕事場に戻って行った。

（分かつちやいたが、いざそうになると寂しくなるのが親心か。…
…行って来いルーフォ、後の面倒は見ててやる）
クシュン

「あらくしやみ、空調強かった」

「何でもない、誰か噂してるんだろ」

舵を取っているリカルが話しかけると、大丈夫と手のひらを数回
振りながらロックは答え、ブリッジ正面の窓からずっと外を見てい

た。昨日ほどではないがずっと窓の外を見ている彼は、ピンとシツポを立て、せわしなく外を見渡している。後ろでロツクの行動を見ていたリカルはその姿がかわいく見えた。

「やっぱ子供みたいね、こいつ」

「んな？今何が言った」

リカルの呟いた言葉に反応してロツクは前を見たまま聞いてくる。それに対し彼女は何でもないとわざとらしく大きな声で答え、そのまま二人は黙り込むが、イスに座って外を見ていたロツクが急に立ち上がるとひとつ前のコンパネを操作し始めた。

少しパネルを叩いて彼が正面のモニターに出したのはこの星系の星図だった。この星系の太陽と、その周囲を回るトラメイを含めた六つの有人惑星と名前の付いている小惑星。そして有人惑星のはるか外周を取り囲むように存在する無数の小惑星のリング。星図を見ながらロツクはそれに手を伸ばす。

「この世界全部が、オレ達冒険者の舞台」

手を伸ばし切り、手のひらがモニターを隠しきった所でその手を思い切りつかむと、ブリッジに響き渡る音量でのどを鳴らした。

「燃えてくるぜ、待つてるよ世界！オレが全部駆け抜けてやる。」

ククク……、ニヤーハツハツハー」

そのままの勢いで高笑いを続けるロツクに、リカルは呆れた表情で首を振ると勝手にしてよと小さく呟き、改めて舵を握り直す。

少年少女、二人の冒険者を乗せた船は、青い空、風を切りながら飛び続ける。Lostと呼ばれるこの世界に眠る、次なる冒険の地に向かって。

エピソード 『寂しくなるのが親心か』 (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

このような場での発表は初めてのためお見苦しい点があったかもしれませんが、楽しんでいただければ幸いです。

次話以降も掲載する予定なので、今後もよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9304g/>

F/A フリーダム/アドベンチャー 第一話 ドリーマーボーイ & ラジカルガール

2011年1月15日02時56分発行